ひの部

【ひきし】

低卑 低卑矮

高の反對。物の價のひきゝにも、地のひきゝにもいふ。例低廉。低地。尊の反對、それより轉じて、地のひきゝにも、位のひきゝにも用ゐる。例卑近卑下。

矮 身長の短小なるにいふ。例矮屋。矮小。矮雞。

【ひきゐる】

率帥 率帥

諸人の從ひ來るをひきゐる意。例引率。統率。將率。率先。人の上に立ちて、諸人を服從せしめ、我意のまゝにひきゐる意。率よりも強し。例元帥。將帥。

【ひく】

引 引曳牽挽

弓をひくことより轉用して、廣く用ゐる。例引用。引力。拘引。延引。引率。引證。物をひきずる意。例曳杖。衣地を曳く。尾を曳く。綱をつけて、牛馬などをひき行く意。それより強ひて物をひきつくる意に轉用す。例牽强附會。牽引。牽牛星。力をこめてひくこと。引よりは其意强し。例挽歌。弓を挽く。挽と同じ。例輓近。

曳牽 曳牽

挽輓 挽輓

掣延 或物を己の方に引き寄せて、其物の自由にさせぬ意。例掣肘。此方へ招き寄する意。例客を延く。賢人を延く。

惹援 惹附纏ひて、離れがたき意。例惹起。老松碧雲を惹く。人目を惹く。手をひき懸けて、引寄する意。例賢を擧げ、能を援く。

【ひげ】

鬚髯髭 鬚頰下のひげをいふ。髯兩頰のひげをいふ。髭鼻下のひげをいふ。

【ひさぐ】

鬻販 鬻販

鬻　物品を賣拂ふこと。例 市に鬻ぐ。

販　行商にて、物品を賣歩くこと。例 販賣。負販。

【ひそかに】

密　密竊潛私陰

「ヒソ〳〵」すること。「コッソリ」すること。即ち人目に觸れぬやうにすること。例 密談。密行。秘密。密獵。

竊　人の目を偷んですること。「シノビヤカニ」の意「窃」と書くは俗字なり。例 竊に考ふ。竊取。竊盜。剽竊。

潛　水中にひそみて、見えぬやうにする意。例 潛行。潛航艇。潛水夫。潛龍。

私　公の反對。表向きならぬこと。人知れず內證にてすること。例 私に考ふ。私見。私淑。私情。

陰　陽の反對。人の見ざる、かげにてすること。例 陰に其私を行ふ。陰謀。陰險。陰德。隱慝。陰氣。陰忍。

【ひたす】

浸　浸漬漸涵　水にて物をぬらすこと。例 川を堰きて城を浸す。浸水。水をしみこます意。

漬　いつとはなしに、次第に水をしみこますこと。

漸　水の中につけたくこと。例 涵養。

涵

【ひとし】

均　均等齊　量目の差なきが如く、物の輕重優劣なく、等分なるをいふ。例 平均。均分。機會均等。定價均一。均衡。

等　段階、階級などの意。それより轉じて類似の事物をいふ。例 差等。等級。等分。富王侯に等し。

齊　長短なく一樣にそろひたること。例 一齊射擊。齊一。

【ひとつ】

一　數のひとつ、又第一の義にも用ゐる。例 一統。一たび戎衣して天下定まる。

壹　專一也と註す。一の字と通用す。

隻　雙の對にて、かた〳〵の義なり。

【ひとへに】

單　偏

單　複の反對。一重にて、物の相重らぬこと。それより薄き意に轉用す。例單騎。單身。單衣。單一。單刀直人。

偏　「ヤタラニ」「一筋ニ」「全く」、など其事にのみかたよれる意。例偏傾。偏頗。偏僻。偏境。偏輕。偏見。偏屈。

【ひとり】

獨　獨孤。獨特。獨身。單獨。獨立。

孤　一人にて相手のなきこと。例孤兒。老心孤なり。「ミナシゴ」とも訓みて、賴む所、寄る所なき人をいふ。

特　取分けて、或は「此物バカリ」はの意。例特立。

【ひねる】

捻　指にてねぢつくること。

撚　捻に同じ。

捫　手さきにて、なでさぐること。

【ひま】

隙　隙孼。閒罅。物と物とのすきまをいふ。又轉じては、交際の中惡しきことにもいふ。例白駒の隙を過ぐるがごとし。隙を伺ふ。互に隙あり。物の割目をいふ。それより交の不和なることに轉用す。例互に孼隙あり。終に孼端を發く。人孼なければ則ち妖自ら作らず。

孼　忙の反對。仕事なき手すきのこと。例退閒。閒暇。閒隙、

閒　物の漏り出づる、穴、隙閒などをいふ。例罅隙。罅漏。

罅

【ひらく】

開　開闢。開拓。開闡。開闢。啓蒙。啓行。啓發。拓殖。拓荒。荒廢せる者か、密閉せる者を、手入れし筋道を付くること。例四門を闢く。土を闢く。荒を闢く。妨害物を取除くことにも、人を敎導するにも、敵人を導きて城に入るゝにもいふ。例開拓。荒蕪の地をひらきて、領土を擴むることに用ゐる。例開明。微を顯し、暗者を開きて明にすること。故に隱れたる者を顯はす意。例闡明。

祛　幽を闡く。

發　衣服などの隙間の生ずるをいふ。例 襟祛けて甲覩ゆ。花のひらくをいふ。それより轉じて、つぼめる者のひらくるにも、伏藏せるものを取出すにも用ゐる。

披　分開の義にて、ひろぐること。例 襟を披く。書を披く。披見。直披。鶴氅を披る。

【ひるがへる】

飜　飜、飄　散亂又は「ヒツクリカヘス」ことに用ゐる。例 紅葉當階飜。飜弄。飜倒。

飄　「風のために「ヒラ〳〵」と飛ぶこと。例 雨雪飄々。流飄萬里。風飄々として衣を吹く。孤飄。

翻　飛ぶ、「ひるがへる」等の意。例 衆鳥翻々たり。大鵬翻す。

【ひろし】

廣　廣、博　弘、闊　狹の反對。有形無形に係はらず、分量の大なるに用ゐらる。例 廣原。廣野。廣袤。廣長舌。廣言。廣告。

博　幅のひろき意。又廣と畧同樣に用ゐらる。例 博學。博聞。博識。博覽。博達。博愛。博文。博引。博採。

弘　廣大の義にて、德行事業の上に用ゐらる。例 道を弘む。

闊　兩者の間のひろきをいふ。例 廣闊。久闊。

寛　物を容るゝに、十分なるひろさあるをいふ。例 寛大。寛宥。寛仁。

宏　深、廣、大の意を有す。多くハ物の規模、企畫などの大なるに用ゐる。例 宏大。宏壯。宏文。宏量。宏業。

【ひろふ】

拾　落ちたる物を取上ぐること。例 拾遺。拾穗。

撫　拾ひ集むる意。例 英華を採撫す。散滯を收撫す。

捃　ねこそげ、ひろひとる事。

ふの部

【ふ】

經　歷閲

經歷　單に過ぎゆくこと。例 經過。年月を經。經歷。一つ一つに渡り行くこと。例 履歷。歷史。歷訪。歷詆。歷仕。古跡を巡歷す。既に三世紀を歷。

閱　越え渡る意。例 歲月を閱す。閱歷。閱閱。

【ふくむ】

含　口中に物の全體を入るゝこと。例 含蓄。含嗽。含英。含有。

銜　口にくはふること。例 杯を銜む。枚を銜む。親鳥雛を銜む。

哺　くくむこと。飲食物の口中に在るをいふ。例 三度哺を吐く。哺乳動物。

【ふさがる】

塞　彼と此と隔りて、互に通せざるをいふ。例 蔽塞。要塞。四塞。

壅　土の横りて、道路のふさがりて通ぜぬをいふ。例 壅滯。壅蔽。

窒　呼吸器のふさがりて、息の通はぬこと。例 窒息。窒碍。

【ふす】

俯　俯伏。偃臥。俛ふ、仰の反對。頭を下げてうつむくこと。例 俯仰天地に愧ぢず。俯臨。俯伏。俯項。

伏　起の反對。身を地上に横へて、人に見られぬやうにすること。又面を地に付けて先方を畏敬すること。例 伏射。伏兵。埋伏。伏匿。潛伏。伏線。伏罪。畏伏。起伏。足を伸ばして、くつろぎふすこと。例 偃臥。偃息。

偃臥　坐の反對。身を席に横にすること。面を上方に向けて横はるにもいふ。例 臥薪嘗膽。臥龍。平臥。坐臥。

俛　俯に同じ。

【ふせぐ】

防　防禦。豫防。防備。防寒具。

禦　豫め後日の用心をなし置くこと。例 外侮を禦ぐ。四海の寇賊を禦ぐ。災禍を禦ぐ。事に差當りてふせぐこと。

拒　「コバム」とも訓む。我近邊に寄せ付けぬこと。例 拒絶。拒否。峻拒。抗拒。悍拒。

扞　外の害をふせぎて、己を守る意。「捍」とかくも同じ。

【ふむ】

踏　踏蹈履踐蹂躪蹣跚。約を踏む。ふみつくること。例

蹈 足拍子をとりて「ドン〳〵」ふみつくるをいふ。例 蹈歌。舞蹈。

履 ふみ行く意。例 履行。霜を履みて堅氷至る。履歴。履德。

踐 ふまへてをること。卽ち固くふみ付けて、立ちをることなり。例 踐祚。實踐躬行。其言踐むべし。

蹂 足にてふみて、すり付くること、「フミニジル」、「フミチラス」などいふに同じ。例 賊庭を蹂躙す。

躙 常に蹂躙と連用す。その意相同じ。躙と紛れ易し。躙ハ音ラン踰ゆる意。

躪 輕くふむこと。又、人の後を追ひかけゆくこと。例 追躪。張良漢王の足を躪む。

【ふるし】

古 古陳。今に對す。日時の上にて久しき以前をいふ。例 古人。古聖。古語。古文。古物。古器。古雅。古往。古詩。萬古。千古。太古。上古。古訓。

舊 故舊。新の反對。久しく年月を經て。物質の惡しくなれること。俗に「フルクサシ」といふ意。例 陳腐。陳言。陳米。陳套。新陳代謝。

故 故陳。新の反對にて、舊の意に近し。例 故人。恙きか。物故。故鄕。故都。故國。故因。新の反對。多く年月を經たること。「フルシ」と訓む。例 舊惡。舊衣。舊詩。舊文。舊家。守舊。舊曆。舊臣。舊幕。舊都。

【ふるふ】

奮 奮震。振揮。顫戰。新の反對にて、舊の意に近し。例 故人。恙きか。物故。故鄕。故都。故國。故因。

震 雷聲の轟きて、地を動すをいふ。例 地震。震動。震木。震怒。

振 ばた〳〵とふるふことにて。震に似て弱し。例 衣を千仞の岡に振ふ。振威。振怖。振氣。振起。振旅。振作。

揮 手にて物をふり動すこと。振よりも弱し。例 指揮。揮毫。涙を揮ひて訣別す。揮霍。

顫 身體手足などの、ぶる〳〵とふるへること。例 手顫ふ。頭顫ふ。心顫ふ。

戰 物畏れして、ふるふこと。例 戰慄。戰々兢々。

への部

【べし】

可　可當宜應須　否の反對にて、許也、肯也、と註す。心にわしはかりて定むる意あり。又命令の意あり。例水深不可渡。中朝舊有知音在、可是悠々入帝鄉。

當　理合如此也と註す。「カウアルハヅヂヤ」の意。例當然。正當。的當。此非人臣所當議。汝當努力。

宜　當也、適理也と註す。「カウシタガヨイカラ」、「カウセヨ」といふ意。例宜來。宜去。宜弔不弔、宜免不免有司罰之。

應　當也、又料度之辭と註す。畧當と同義なれど、當の如くに理に當るほどの意なく、たゞ「ソノハヅデヤ」といふ程の意なり。例匹夫熒侮諸侯者、罪當誅。

須　用也、待也と註す。下知する辭になりて、當の字よりは強し。例須來。須去。須以決事。

【へだつ】

隔　隔阻物と物との間に、他の物を入れて相遠ざくるをいふ。例隔絶。隔離。間隔。

阻　道路山川のへだゝること。例それより兩者の間を塞ぎ止むる意に用ゐる。例嶮阻。阻隔。山阻。賢者の路を阻つ。諫を阻つ。

【へつらふ】

佞　佞諂　相手の氣質を知りて、喜ばすこと。例便佞。佞者。奸佞。

諛　利のために、心にもなきことをいひて、人にへつらふこと。例面諛。阿諛。諛言。諛辭。

諂　諛に同じ。例讒諂面諛。諂諛の小人。

【へる】

減　減耗　加增の反對。數量の以前より少くなれること。例增減。減少。輕減。數量の不足し行きて、その不足せる分は、消滅して無くなれること。例消耗品。

ほの部

【ほがらか】

朗　廓　豁　洞

朗　うちひらけたること。明、開の二意を兼ぬ。例 高朗。爽朗。開朗。

廓　郎に同じ、されど之れは、明、開の外に大の意をも兼ぬ。例 廓如。廓開。廓大。廓清。

豁　今まで塞りたるものゝ、忽ち開け通ずる意。例 豁然として大悟す。豁然として貫通す。

洞　行き抜けになること。例 洞見。洞察。識密にして、鑒も亦洞かなり。

【ほこる】

誇　自慢することにも、事實以上に大きくいひ廣ぐるにもいふ。卽ち大言を吐くこと。例 誇大。誇稱。誇言。

矜　我身の賢をほこること。氣ぐらゐの高きこと。己が功を稱揚すること。卽ち手柄自慢なり。

伐　戈矛を交ふ。

【ほこ】

戈　片鎌のほこなり。例 干戈を交ふ。

矛　長さ二丈にて、鎌のつきたるほこ。

戟　十文字のほこ。

槊　馬上にて使ふほこにて、長さ一丈八尺のもの。

【ほし】

星辰　夜に入りて、大空に輝くもの。例 流星。恆星。游星。彗星。日月所會謂之辰。とありて元來、星の宿る位置のことなるが、それより直ちに星の事に轉用す。例 北辰。

縱恣擅横放　我心のまゝにて、氣儘勝手にするをいふ。例 縱覽。放縱。豪縱。惡事を氣儘にすること。例 横恣。驕恣。專の意。一人にて事をほしいまゝにすること。例 君寵を擅にす。擅權。無理に我儘勝手を行ふこと。例 縱論。横議。專横。横行。羈の反對。人の束縛を受けぬこと。締括なく「ヤリッパナシ」の意の時は、放逸、放恣など用ゐ。大膽にして、常規に拘泥せぬ意の時は、豪放、曠放など用ゐる。例 放蕩。放談。放論。放言。

【ほしいまま】

肆　思ふ存分にすること。例放肆。鬪訟を肆にす。揚墨は肆に行ふ。

【ほそし】

細　細纖　絲のほそき意より、事物の上に轉用せらる。例細心。細密。細說。細君。細腰。精細。

纖　細に似て、かよわき意を含む。　纖弱。纖手。纖月。

【ほとんど】

殆　殆幾　「アヤフシ」とも訓む。事の危險に近けるをいふ。「今少シ」、「スデノコトニ」などいふ意。例危殆。沛公は殆天授なり。

幾　近き意にて、殆に似て、其意弱し。

【ほとり】

側　側畔邊　側畔邊瀕陲頭　「ソバ」とも訓む。「片ワキ」の意。例君側の姦を清む。田畑の境界なるくろのことなり。それより河畔など、ほとりの意に用ゐる。例墓畔。物のぶち、又はきはをいふ。例周邊。水邊。邊境。

瀕　水のほとりをいふ。

陲　國はづれの地をいふ。例邊陲。

頭　とりつきの所をいふ。例渡頭。

【ほのほ】

炎　炎焰　火の熾に燃ゆること、それより熱の烈しき意に用ゐる。例炎上。炎焰天に漲る。炎暑。炎熱。炎天。炎威。

焰　火の燃えあがるさまをいふ。例火焰。

【ほぼ】

粗　粗略約　粗略と連用して、「アラマシ」の意なれば、その大概をいへること。詳細の點をはぶきて、大體肝要の點を取れること。

略　大抵を荒括する辭にて、「オホヨソ」と譯す。

約

【ほむ】

賞　賞譽褒美讃贊稱頌　罰の反對。功績を感謝し、又ハ奬勵するために、物品を贈ること。例賞與。賞品。賞狀。賞詞。賞翫。賞典。

譽　褒　美　讃　贊　稱　頌

毀の反對。其人のほまれとなるやうに、ほむること。例名譽。聲譽。榮譽。毀譽。貶の反對。或は物品を與へ、或は言にてその功績をほめ、人の目に付くやうにすること。例褒美。褒貶。褒狀。

人の功績をよしとしてほむること。例美談。美擧。美名。賞美。稱美。嘆美。

其人の功績をほめて、世人に知らしむること。例讃美。讃辭。讃詞。

讃に同じ。

もてはやし慕ふ意。

人の功德をほめて歌文などに作ること。例頌德碑。

【ほゆ】吠　吼　吼　咆　哮

吠　犬のなく聲をいふ。その他も此に似たる者の聲を云ふ。

猛獸のなく聲なり。例獅子吼。虎吼ゆ。鯨吼ゆ。

猛烈に吼ゆるをいふ。例咆哮して止まず。

咆と同じ。咆哮と連用す。

【ほり】壕　隍　渠

壕　城の周圍に設けたるほりをいふ。

塹の水のなきものゝ稱。卽ち「カラボリ」。

池の水なきものゝ稱。要害などに關せず。

田畠に灌漑のためか、又は運送の便のために設けたるほり。

【ほる】雕　琢　鐫　鑿　掘

雕　琢　ほりものをすること。例玉人をして雕琢せしむ。

ほりものゝ、去あげをすること。例琢磨。雕琢。

ほりつくること。

のみにて、ほること。うがつ（穿）とも訓む。

穴をほりうがつこと。例井を掘る。

【ほろぶ】滅　亡

滅　次第に衰へて、遂に消え失するをいふ。例消滅。破滅。滅亡。討滅。寂滅。泯滅。

族滅。

亡　有又は存の反對。有りし物の無くなれること。死亡などいふ時は。此世に存在

せぬことなれども、逃亡などいふ時は、逃げかくれて、その處に存せずの意。故に滅よりは其意弱し。例存亡。亡失。敗亡。亡者。未亡人。

喪泯　滅亡し果つるをいふ。消滅して跡なきに至るをいふ。

まの部

【まがる】

曲　曲枉鉤　幾つもまがりたること。それより物の入組みたることに用ゐらる。例曲解。婉曲。曲折。委曲。懇曲。

枉　そりまがることにて、大きく一つの曲りをいふ。枉屈の意にも用ゐらる。例寃枉。枉駕。

鉤　かぎなりに、まがりたること。

【まく】

負　負輸　勝の反對。最も廣く用ゐる。

輸　贏の反對。俗語には此字を用ゐて、負の字を用ゐず。

【まこと】

誠　誠信眞實固諒洵允悃　偽の反對。心の底より出でたる飾りのなきまごころをいふ。例誠意。誠心。誠實。至誠。忠誠。

信　言語の上に偽なきをいふ。それより約束の事をも信といふ。例信義。信實。信言美ならず。通信。音信。

眞　假、贋、妄の反對。誠は人の心に付きていへど、眞は物の質に付きて、まちがひのなきことにいふ。例眞實。眞偽。眞如。天眞爛漫。眞理。

實　虛の反對。「ミノリ」とも訓みて、實の十分にいることなり。性行の上には用ゐずして、道理上にのみ用ゐる。例實行。實際。篤實。實踐。實地。實用。

固　相手の語を受けて、もとより然りとの意に用ゐらる。

諒　固く約を守ること。信と實とに通用せらる。

洵　信と同義なり。くれぐもといふ如く、繰反す意あり。又歎美の意あり。例洵美且仁。

允　信と同義なり。いかにも、といふ程の意。例 允文。允武。允非小子之所能及也。

悃　心のたけを盡す意。

【まさに】

正　正当方将且　邪道へ行かず、正しく眞向なる意にて、道理上かくあるべき筈との意。

當　當然斯くあるべき筈との意。

方　事の最中にて、眞盛りなる時をいふ。戰方に酣なりといふ時は、戰爭の最中をいふ。

將　既の反對。今少し時を經ばの意。「オッツケ」、「ヤガテ」などいふに當る。

且　將に似て、其意強く急なり。

【まさる】

優　優勝劣の反對。力の餘りあることにて、「ユルリ」として迫らざる意。例 優待。優遇。優勝。

勝　負の反對。人の上に出づること。

愈　勝也、賢也、過也と註す。彼よりも、此がましなる義なり。

賢　愚の反對にて、たちあがること。

【まじはる】

交　交雜參錯混　二個の物體ありて、其兩端の入りまじること。例 交叉。交際。犬牙相交る。臂を交へて語る。

雜　純一の反對にて、多數の物の入りまじること。例 雜駁。蕪雜。雜兵。雜炊。

參　二個若しくは、多數の物の間に插まりて、其と同列になること。例 參政の權を得。參議。天地に參りて、その化育を贊く。參謀官。

錯　入り違ふ意。例 錯亂。錯雜。錯誤。

混　入りまじりて、見分けのつかぬこと。例 混入。混合。混一。混雜。

【ます】

增　增益。減の反對。階級を上して多くすること。例 增俸。增給。增兵。增加。增額。增水。增員。

益　損の反對。利益のあるやうに增加すること。例 益友。純益。增益。有益。公益。

滋　ます〳〵とも訓む。雜草などの多く繁り生ずる意。はびこる意をも含む。

倍　五倍十倍などいふ如くます意。

【また】

又亦　又亦復還　其上またの意。あるがうへに重ぬること。例山又山。角力を見又芝居を見る。「モマタ」といふ意。詩も好めば歌も亦好む。月もよし、花も亦よし。など用ゐる。

復　同一の事を二度繰りかへすに用ゐる。復戰ふといへば、二度同じやうに戰ふこと。復戰はずといへば、同じ戰を二度繰りかへさぬをいふ。

還　循環の義にて、めぐり歸する意より、「マタ」の辭となる也。管子に還四年伐孤竹。神龍失勢、即環與蚯蚓同。魏豎の傳。

【まつ】

待　確に來る人、又は起るべき事件を豫期してまつ意。例期待。待峙。相待。接待。待遇。

俟　自然の成行きをまつ時。又は何時來るか、又果して來るや否や疑しきをまつに用ゐる。例人事を盡して天命を俟つ。後の識者を俟つ。

【まづし】

貧窮　貧窮　無財也と註す。富の反對なり。例貧窶。赤貧。極也と註す。何事にも手づまることにて、財産の事に限らず。例窮危。窮困。窮鬼。

【まつたし】

完　完全　缺くる所なき意。一事物に付きて、缺損の處なきをいふ。例完美。完成。完了。完璧。完備。完結。完全。具足して、殘る所なき意。多數の事物の揃へるをいふ。例全部。大全。全文。全般。全軍。全滅。全盛。全美。全篇。全市。全世界。

【まつり】

祭祀　祭祀　春のまつり、秋のまつりといふやうに、時を定めて神をまつるをいふ。又何時に限らず、物をそなへて祭る意にも用ゐる。例祭式。祭禮。祭典。定まりたるまつりをいふ。

祠　神社を建てゝ、その中にまつる意。例合祠。淫祠。

【まとふ】

纏絡紆

纏絡　絲にて、きり〳〵とまくこと。例纏結。纏束。からまり、まとふこと。皆閒のすきたる意あり。例絡車（絲ヲトル車ノコト）。絡頭（馬ノ首モヅラ）連絡。もつる〵こと。文選に我思鬱以紆。

【まもる】

守護衛

守　見張りをする、見詰むる、など目を放たずして見ること。例守備隊。守衛。國守。看守。

護　大切に防ぎまもること。例保護。護衛。擁護。守護。庇護。看護。

衛　周圍を取卷きて、番をすること。例衛士。衛戍。衛兵。守衛。

【まよふ】

迷惑

迷　行く道の分らずして、途方にくる〵こと。例迷信。迷路。迷離。昏迷。「マドフ」と訓む。是非の判斷のつかずして、心の決しがたきをいふ。例疑惑。

惑　不惑の年。當惑。迷惑。誘惑。

【まらうど】

賓客

賓　上客の事なり。又上客ならずとも。客として厚くもてなさるゝ人をいふ。

客　外より來るものをいふ。例過客。旅客。寄客。食客。賓客。顧客。

【まれ】

稀罕

稀　稠の反對にて、疏（まばら）なるをいふ。例稀薄。稀少。

罕　「ヲリ〳〵」「時々」「タマ〳〵」などの意。例子罕に利を言ふ。

【まろし】

丸圓團

丸　まろき、球體をいふ。大小通じて用ゐる。例丸藥。丸呑。鉛丸。丸木橋。丸木船。丸柱。方の反對。物に角のなきこと。例圓滑。圓轉。圓滿。圓球。圓座。圓柱。

圓　まろめ集めたるもの。例團聚。團〻たる明月。團欒。團隊。團扇。大團圓。

團　申と同音にて、のべ告ぐること。例申請。申告。上申。申達。

【まをす】

申白

白　明白にまをすにて、あからさまにのぶること。例告白。敬白。

奏　臣下の天子に申上ぐること。例 上奏。奏聞。

稟　下の者が、上の者に申上げて其指揮を受くること。例 稟請。稟申。

啓　口を開きて申述ぶる意より、言上の義とす。例 啓上。拜啓。

みの部

【み】

身　身體をいふ。

躬　自分での意。時には、身、躬通用することあり。

【みことのり】

詔　詔勅の大事に書せらるゝみことのり。

勅　尋常の小事に書せらるゝみことのり。

【みぞ】

溝　溝渠をいふ。

渠　ほりのことなり。禮記に城郭溝池、以爲固。みぞとも、ほりとも訓む。

洫　田間の水道をいふ。水はきのために、設けたるみぞ。

【みだりに】

妄　妄動。妄作。妄語。

猥　輕卒にすること。無暗にすること。例 猥猥。煩猥。猥雜。

濫　他人の輕蔑を受くるをも顧みずしてする意。例 濫伐。濫用。濫刑。濫賞。

漫　爲すまじきことを、手當り次第にすること。例 漫言。漫筆。漫錄。漫然。

叨　筋道の明ならぬこと。あてのなきこと。

涙　思ひかけずの意。

取締りのなきこと。浪費、孟浪など、連用す。

【みだる】

亂　亂擾。紛亂。紊治の反對。不秩序、不正整なること。例 國亂。亂邦。動亂。亂髮。爭亂。內亂。戰亂。

擾　亂の意と、煩雜の意とを兼ねたり。「ゴタ〳〵」すること。例 騷擾。粉擾。塵寰擾々。

紊　多數の物の、亂雜して、條理のたゝぬこと。例 紊亂。

紛　紊に似て、結ぼるゝ意を含む。

攪　かきみだすの意。一物の中に或物の入り來りて、掻きまはし、亂す意。例攪亂。

渚　水の濁ること。「澈」と通用す。例渢渚。渚濁。

【みち】

道　路途徑　人のあるくみちにて、大小通じて用ゐらる。それより、人の行ふべき筋道をいふ。例大道。街道。天道。道德。邪道。

路　道の如く大小共に通用す。されど路は道の一部分を指すこと多し。又轉じて人生の上にも用ゐる。例末路。世路。行路難。路頭。大路。小路。路上。路傍。

途　小道なり。此處より彼處までの路筋をいふ。又轉じて事の始終の間をいふ。「塗」と書くも、音義相同じ。例半途。中途。途次。途上。歸途。

徑　細きみちにて、細路といふに同じ。

【みつ】

充　實　充實。補充。充大。充滿。充塞。

滿　盈　空處なきまで、物を詰込むること。例充實。充實。

虛　の反對。物の中に一杯入りて、確なる意。例確實。充實。

缺　の反對。物の中に一杯にみつること。例正氣天地に滿つ。酒杯に滿つ。滿月滿潮。滿面。滿場。滿腔。滿開。圓滿。引滿。

縮　又は虧の反對。次第にみちゆくこと。例盈虧。盈滿。盈虛。

【みづから】

自　親　自親　他に對する語。人手を假らぬこと。例自身。自己。自分。自活。自動。

躬　「シタシク」とも訓む。「實地に」又は「まのあたり」の意。例親任。親閲。親展。親兵。

【みどり】

綠　翠　己が身を以てすること。例躬行實踐。朕躬后土を祭る。

碧　綠　もえぎ色なり。詩經に、綠竹猗々。

翠　「ルリ色」なり。例翠色。

碧　空色なり。例水碧に、沙明かなり。

【みな】

皆　咸　皆　ある限り殘らずの意。例悉皆。皆無。

咸　暑皆に同じ。廣大の意に用ゐる。例 咸其德を一にす。天下咸服す。

僉　咸に同じ。例 諸卿僉議す。

【みね】

峯　細長くして尖りたる山をいふ。

嶺　山の頂上をいふ。

岑　小高き山をいふ。

【みる】

見　視覩覽看瞻覩睹相瞰覲

目に觸るゝことにて、此方より求めてみるにあらず、自然と見えてくるをいふ。例 見聞。拜見。瞥見。望見。見識。卓見。隱見。閱見。

視　此方より心をとめてみること。例 視聽。視察。蔑視。輕視。近視眼。熟視。正視。直視。眄視。睇視。諦視。

覩　喜びてみる、考察して仔細にみる等の意。例 覩月。覩梅。覩客。覩察。壯覩。大觀。主覩。客觀。洞觀。參觀。

覽　一通り目を通す意。例 博覽。一覽表。遊覽。乙夜の覽。天覽。聖覽。上覽。電覽。周覽。

看　目の上に手をかざしてみる。思案して、見つむる意。例 看護。看守。看破。看病。

瞻　仰ぎみる意。例 彼の日月を瞻る。瞻望。瞻仰。

觀　見に似て稍や重し。

覩　互に相見る意。例 生きて是の感を覩んよりは、死するに若かじ。

睹　覩の右文字。例 此れ大人の親しく覩る所に非ずや。

相　樣子を見、又は善惡を見定むること。例 人を相す。地を相す。

瞰　俯きてみおろす意。例 俯瞰。下瞰。

覲　下の人の上の人にまみゆる意。例 朝覲。

むの部

【むかふ】

向迎　向迎邀鄉嚮對迓逆

背の反對。目的の方へ、正しくむくこと。送の反對。來るに先きだちて。此方より出でむかふること。例 歡迎。迎謁。送

迎。

邀 來る者を、強ひて遮ぎり出でむかふること。卽ち、此方より待ち設けて出で迎ふる事。例 邀擊。鵶を邀へて上言す。杯を擧げて、明月を邀ふ。

鄉 向と同義なり。書經に、若火之燎于原、不可鄉邇。

嚮 向と同義なり。禮記に、南嚮而立。

對 さしむかふこと。杜詩に、山危一徑盡、岸絶兩壁對。

迓 相迎也と註す。雙方より出で迎ふる意あり。

逆 道まで出で迎ふること。

【むくゆ】

報酬酢 報復の意にて、俗にいふ返報なり。恩怨共に用ゐる。例 報復。報答。報知。報告。獻酬と連用して。客に杯をさすことを獻といひ。客より主人に返杯するを酬といふ。それより何にてもかへす義に用ゐる。多くは善には善を、惡には惡をかへすにいふ。再び返杯する意。酬酢と連用す。それより應對のことに轉用す。

【むさぼる】

貪婪 貪、婪、慾深き意。

饕餮 飽くまでほしく思ふこと。大食の意より轉じて、財貨をむさぼることに用ゐる。饕と同義なり。

【むしばむ】

蠹蝕 蟲くひになること。內より食ひかくる意。例 國家の蠹賊。蟲くひになる義は蠹と同一なれど、これは外より食ひかくる意あり。例 蠶蝕。日蝕。月蝕。

【むせぶ】

咽噎 咽喉に物の、こだはること。例 嗚咽（ムセビナク）。哀咽（上ニ同ジ）。咽と同義。例 中心噎ぶが如し。鬱噎。

哽 哽咽と同じ。例 哀哽。悲哽。

【むち】

鞭笞策箠檛 鞭、笞、策、箠、檛

鞭 革にて作れるむち。

笞 竹のむちにて、人を打懲すに用ゐる。

策 竹のむち、馬を勵ますために用ゐる。

箠 人又は馬をうつ竹のむち。

檛 木にて作れるむち、人を打懲すに用ゐる。

【むなし】

空 虛 曠 有の反對。中に一物もなきこと。卽ちカラのことなり。例 財貨空し。朝廷空し。田野空し。空山。空谷。空論。空言。空理。空拳。空宅。

虛 實の反對。中に少しく物はあれども、充ちてあらぬこと。故に空よりは、その意弱し。例 大虛。虛心。虛病。虛空。虛實。

曠 日をむだに費すこと。例 曠日彌久。曠官の誹。

【むら】

村 古文には皆邑の字を用ゐたり。後世にては、邑は都邑のことにて、村よりも繁華なる處の意に用ゐる。

落 居也と註す。人の聚り居る所。例 村落。聚落。

めの部

【め】

目 眼 眼瞼、眼球等を合せて目といふ。例 目送。目笑。目中の黑白の處を眼といふ。例 白眼。青眼。斜眼。

【めぐる】

巡 廻 繞 遶 周 旋 轉 匝 縈 匯 注意して視まはること。例 巡察。巡視。巡行。巡査。巡狩。巡覽。水の渦卷くが如く、幾度もぐるぐるまはること。「回」と書くも音義相同じ。例 廻章。巡廻。回天動地。回想。起死回生。回復。物の周圍をつき纏ひめぐること。例 圍繞。纏繞。繞と同字なり。隅から隅まで、一まはりする意。「週」と書くは俗字なり。例 周遊。周行。周覽。周圍。周匝。

旋　中心ありて、くる〳〵とまはること。例 旋風。螺旋。旋行。旋毛。旋轉。周旋。

運　次より次へ移りゆくこと。例 世運。氣運。運命。運轉。運行。天運。日月の運行。四時の運行。

轉　車輪のめぐるをいふ。例 自轉車。輾轉反側す。轉任。

匝　物の外圍を一めぐりすること。匝は元匝の俗字なれども、今普通に此を用ゐる。

【め】

縈　からむこと。例 葛藟之を縈る。

匯　水の先へ流れず、跡へもどりて、外の水に合するをいふ。

【す】

召　召徵辟聘

徵　口にて呼ぶにも、手、又は使にて呼ぶにも用ゐる。例 召喚。召集。天子より召さるゝこと。年貢など取り立つるにも用ゐる。例 徵兵。徵證。役人より呼び出すこと。

辟　使者幣帛を以て、呼び迎ふること。例 招聘。厚聘。聘禮。

聘

もの部

【もし】

如　如若

若　假設或は未定の辭にて、是の如きことが、假にありとせばの意。

儻　如に同じ。されど、もしくはと訓む時は「或」といふに同じ。

儻　或は然る時は、の意にして、俗に「フトサウナレバ」、或は「萬一」といふに同じ。

【もって】

以　以用

用　將庸

將　「もって」は、もて、又はもちて、の音便なり。持は、手に物をもつこと。有は金錢などを所有する意。保は、城、國、家などをもつ意にて、いづれも以とは異なり。以はデと譯す。例 忠信以得之。溫良恭儉讓以得之。事之以禮葬之以禮。此の字は元來、「モチフ」又は「モチヰル」と訓じて。實語なれども、以の如く助語に用ゐることあり。以よりは意強し。例 戒之用休、董之用威。以德若彼、用力如此。詩語、俗語に用ゐて、畧以の字に似て。其意狹し。「ナガラ」と譯す。例 吟將來、

吟將去。

用に通じ用ゐる。

【もっとも】

最尤

最　第一番にすぐれたるものをいふ。例 最上。最大。最後。最終。最末。最近。最初。

尤　常よりすぐれたるもの、意。例 尤物。

【もっぱら】

專純一

專　「もっぱら」は、もはらの音便なり。物の一筋にて、二つ三つに分れぬこと。例 專門。專使。專志。

純　一色也と註す。無紋無地のことにて、雜の反對。例 純白。純粹。純金。

一　一にして、雜らず分れぬ意。例 專一。純一。一色。

【もてあそぶ】

玩弄

玩　慰み物にすること。「翫」と書くも同じ字也。例 奇玩。珍翫。玩味。玩山水。

弄　なぶりものにすること。例 愚弄。嘲弄。弄臣。戲弄。

【もと】

本原元素舊故固

本　末の反對。樹木の根に近き處をいふ。例 本末。本質。本來。本務。本堂。本心。本邦。本山。

原　水の源の意。事物の濫觴を尋ねていふ詞。例 原理。原料。原始。原由。原稿。原語。原因。

元　始、首の意。元旦。元日。元年など用ゐる。

素　もとよりとも訓む。白き帛のことにて、下地からといふに同じ。例 平素。元素。素養。質素。素志。素懷。素願。

舊　新の反對。まへかたの意。過去の時を指す。例 舊聞。舊知。故舊。舊慣。舊習。舊の意に同じ。故人、故舊など用ゐる。

故　もとよりと訓む。まことにとも訓む(其條を看よ)。前々より、勿論などの意。

固　

【もとむ】

求索覓

求　索　覓　需　干　徼　要、

探求、請求、尋求等廣く用ゐらる。例 要求。購求。

尋ねもとむる意にて、求よりは狹し。例 搜索。探索。

探しもとむることなれども、小量の物をもとむるに用ゐる。「覓」と書くは俗字

なり。

需 無くてはならぬと、待ちもとむる意。故にまつとも訓む。例需用。軍需。

干 、、をかすとも訓む。強ひてもとむる意。例知其不可、然且至、則是干澤也、孟子。

徼 まちうけて、ねらひをる意。例小人行險、以徼幸、中庸。

要 暑徼に同じ。例路に要す。其天爵を修めて、以て人爵を要む。

【もとる】

悖 強く逆らふこと。例悖德。悖理。悖逆。悖禮。

戾 和の反對。ねぢ曲る意。例背戾。乖戾。違戾。悖戾。暴戾。

很 人の言ふことに反對して爭ふこと。「狠」と書くは俗字。

愎 剛情にて、人の意見に從はぬこと。例剛愎。諫に愎る。

【もの】

者 動物の代名詞、特に多くは人間を指す時に用ゐる。又上文の事物を承けて指す意の時は、その指す所に隨ひて、「コト」「トコロ」「ハ」など讀む。例仁者。勇者。漁者。從者。侍者。長者。賢者。使者。

物 動物以外のものをいへど、時としては、宇宙間一般のものを指していふことあり。例遺物。財物。景物。物價。物論。物議。物質。物產。物名。人物。

【もろし】

脆 小弱易絕と註す。堅固ならず、こはれ易き意。例脆弱。

臨 脆に同じ。詩經に、王事靡盬。

やの部

【や】

乎 「ヤ」「カ」「カナ」など訓ず。疑問の辭とも、咏歎の辭ともなる。尙「か」の條を看よ。

哉 「ヤ」とも「カ」とも訓ず。咏歎の辭。

耶 「ヤ」「カ」二ツの訓あり。疑問の辭。尙「か」の條を看よ。

居 物をするつけていふ時に用ゐる辭。「デアルゾ」と譯す。詩經に、日居月居云々とあり。

【やく】

燒 焚燎灼

燒　火を或物體に付くるをいふ。
焚　燒けをるものより、他に燃え移ること。卽ち延燒することなり。
燎　燃え付くこと。
灼　あぶりてやくこと。

【やしなふ】
養　養育。例養育。培養。養育。
鞠　動植物を生立つやうに、育つること。
畜　養に同じ。されど、抱き上げて育つる意あり。例鞠育。鞠養。
育　禽獸を飼ひやしなふこと。尙「かふ」の條を參看すべし。例牧畜。家畜。畜生。

【やす】
瘦　はぐくみ、そだつること。例愛育。育兒。敎育。飼育。生育。
瘠　肉の少くなれること。廣く用ゐらる。例瘦削。
　肥の反對。瘦中の甚しきことにて、やせ疲れたるをいふ。例瘠土。肥瘠。

【やすし】
安　安寧。康泰。易綏。
　危の反對。危げなく、穩に落付きたるをいふ。最も廣く用ゐらる。例安堵。

寧　安心。安意。安穩。安危。安泰。安樂。
康　安らかに定まる意。例安寧。寧處。
泰　安と樂との字を兼ぬ。例安康。康寧。
易　安に寬大の義を兼ぬ。例泰平。安泰。
綏　難の反對。事物の爲しやすきこと。例容易。簡易。平易。難易。
　乘車せる時、執る所の繩なり。之を執れば倒れずして安し。故に安堵の意に用ゐる。例綏撫。

【やとひ】
傭　傭雇。例傭耕。
雇　人に雇役せられて、賃錢を受くること。
　傭に同じ。

【やどる】
宿　宿泊。旅宿。止宿。
舍　舍營。官舍。寄宿舍。塾舍。
次　家屋の義轉じて止宿の義に用ゐる。
　幾夜もとまること。左傳に、再宿曰信、三宿以上曰次。

【やなぎ】

楊柳 枝の上方に向ひて立てるやなぎをいふ。枝の下方へ垂れたるもの。「ゑだれやなぎ」のこと。楊柳と連用する時は、只やなぎの意となる。

【やはらか】

柔軟和 剛の反對。人の氣質性情のやはらかなるにいひ、それより金石樹木などにもいふ。例 柔弱。柔順。

軟 硬の反對、柔の外に弱の意を兼ぬ。●●輭と書くも同字なり。例 軟弱。柔軟。軟化。軟風。

和 「やはらかになること」。「靜まること」。例 平和。和合。和解。溫和。

【やぶる】

敗破敝壞 成又は勝の反對。いつとはなしに漸々やぶるゝこと。例 敗軍。敗走。優勝劣敗。敗亡。失敗。敗績。敗衂。敗滅。敗北。腐敗。急に物をうちわりやぶること。例 破竹の勢。破滅。破損。破談。破顏。破倫。說破。看破。破天荒。破産。破壞。破獄。完の反對。衣服などの、古びてやぶれたるをいふ。例 敝れたる縕袍。敝衣。敝履。勞敝。くづれこはるゝ意。例 崩壞。壞亂。破壞。

【やまひ】

疾病 急に發れるやまひをいふ。疾の重くなれるをいふ。

疫病 流行病をいふ。例 時疫。疫病。惡疫。

痾 永びける病をいふ。例 宿痾。沈痾。

痼 持病にて、容易になほらぬやまひ。例 痼疾。

【やむ】

止已息罷歇休輟 止 行の反對。とまること、とどむること。例 廢止。禁止。停止。中止。

已 事を果しゝこと。事を終りしこと。

息 やみ絶ゆること。例 止息。絶息。

罷　とゞむる、畢る、廢棄等の意。例 罷免。罷業。

歇　とぎるゝこと。例 閒歇。

休　休息。休業。休暇の如く、一時やむること。

輟　今迄なし來れることをやむる意。

【やもめ】

寡　寡婦。

孀　配偶のなき女。但し男女通用す。例 寡居。寡婦。

嫠　寡に同じ。

嫠　夫にわかれて、獨すむ女。例 泣孤舟之嫠婦。蘇東坡。

【やや】

稍　稍良。

良　度合の小なること。「チトバカリ」の意。

寖　時閒の上にて、「カナリ」、又は頗といふに當る。

較　やうやくと訓む。其度の漸次增進することにて、「ジリ〳〵次第ニ」といふに同じ。

比也と註す。くらべて視れば、げに少し差ふの意。故に少しと譯す。

【ゆく】

行往之逝適

ゆの部

行往　止の反對。歩み進むこと、例 進行。行商。行人。行旅。晝夜兼行。

之　來の反對。「ゆきすぐること」此方より彼方へ進みゆくこと。例 往來。往復。往還。往昔。往時。

逝　目的地を指してゆく意。例 岐山の下に之く。夷狄に之く。

適　一旦ゆきて、再び歸り來らざる意。例 長逝。永逝。逝去。逝水。目的地に、一筋にゆく意。之の意に近し。例 適歸。天子諸侯に適くを巡狩といふ。適くとして可ならざるはなし。

【ゆたか】

豐　豐饒裕胖寛優

多大、盈足の意。財貨の多きにも、道德の大なるにも、肉づきふとりたるにもいふ。例 豐富。豐頰。豐大。

饒　多くして滿ち足る意。例 豐饒。富饒。饒舌。

裕　衣服のゆったりとしたる意より、轉じて物のゆるやかにして迫らぬことに用ゐる。例富裕。餘裕。

胖　身體の肥滿せること。大きくして安らかに落ち付けること。例心廣く體胖なり。

寛　窄の反對。心のくつろぎて、ゆるやかに、ひろきをいふ。例寛大。寛容。寛宥。寛恕。

優　劣の反對。力の優りて餘りある意より、何事も苦惱とせざるにいふ。

【ゆづる】

禪　禪讓。

讓　天子の、位を他にゆづり渡さるゝこと。例受禪。禪位。

遜　自身を後にして、他人を先きにすること。又、己捨てゝ他に渡すこと。例讓與。辭讓。謙讓。己退きて、他人に與ふること。例位を遜る。

【ゆばり】

尿　尿溺。旋溲。小便のこと。

溺　尿に同じ。

旋　小便なり、便旋の義に基きて、小便の義となれるなり。

溲　前溲は大便をいひ、後溲は小便をいふ。故に、大小二便に通用す。

【ゆふ】

夕　夕晡。朝の反對にて、暮に向ふ時をいふ。

晡　申の時にて、日の入りかたになりたる頃をいふ。上晡、中晡、下晡を、三晡と稱し、之を總じて晡時といふ。上晡は申の上刻、中晡は申の中刻、下晡は申の下刻なり。申の時とは、今日の午後四時五時なり。

【ゆるし】

緩　緩弛。緩徐。緩絲などの、引締らぬこと、緊しからぬこと。それより何事にても、しまりのなきことに用ゐる。急の反對。例緩急。遲緩。緩歩。

弛　弓の弦をゆるぶる意より、氣をゆるぶることにも、政治の衰ふることなどにもいふ。例紀綱弛廢。力解け勢弛ぶ。懈弛。

寛　「くつろげること」。ゆっくりとせること。それより度量の廣大なるに轉用す。

徐

【ゆるす】

許　**赦**　**免**　**宥**　**釋**　**恕**　**縱**　**容**　**允**　**放**

例 寛容。寛仁大度。寛大。

疾の反對。言語動作のしとやかなること。

許赦免宥釋恕縱容允放

相手の希望を、それにてよしとゆるすこと。例 許諾。許可。許容。允許。聽許。

特許。免許。

罪過をゆるすこと。例 特赦。大赦。赦免。恩赦。

まぬかるとも訓む。罪過をゆるして、まぬかれしむること。例 放免。免除。赦免。免許。免狀。御免。免役。

なだむとも訓む。見のがすこと。寛大にして小罪をゆるし置くこと。例 宥恕。

宥免。

とくとも訓む。罪過ある者を、解き放しゆるすこと。例 釋放。無辜を開釋す。

情狀を酌量し、人情の上より大目に見て強ひて罰せずにゆるすこと。例 宥恕。寛恕。

ほしいまゝとも訓む。手放しゝて、其者の氣儘にすること。

いるとも訓む。人の謝罪をいれて、勘辨すること。

まことにとも訓む。相手のいふことを、まことによしと認めて、うけがひゆるすこと。例 允許。允可。

追ひはなしやりて、その後は干渉せぬこと。例 放免。開放。

【ゆゑ】

故　**肆**　**所以**

故肆所以

「ソノタメ」、又は「ソレニヨリテ」の義なり。上句、上段を受けて、下句、下段を起す辭とす。又句末に用ゐることあり。上句の意終りて、下句を、讀み起す時、句頭に此字ある時は、「カルガユヱニ」と讀む、これは、「カヽルガユヱニ」の約まれる辭なり。例 是故。茲故。亦唯汝故。

上文を承けて、其事の然るが故に、今此の如しといふ辭なり。されば、故今也と註せり。此文字は、故の條に說明せるが如く、「カルガユヱニ」と讀むをよろしとす。例 肆中宗之享國七十有五年、書經。

この二字を「ユヱ」と讀むは、「ユヱ」の音便なり。

よの部

【よ】

世代 世代。始より終までの、時世に就きていふ。例 周の世。漢の世。入りかはりになること。古之王者、易代改號取法五行と家語にあるが如きをいふ。又、世と同樣に用ゐることあり、漢の代、唐の代などいふが如し。

【よく】

能善克 能善克。己が思ふ如く、自由に爲すことを得る意。例 不可能。無能。多能。能文。能書。能は十人並によくすることなれど、善は十人並以上に優れて、見よく、立派にする意。

克 克。かつとも訓む。困難にうちかちて、成就する意。故に賞美の氣味あり。例 克己。克く用ゐる。克く護る。克く當る。

【よし】

善良好嘉佳吉淑 善良。好。嘉。佳。吉。淑。善良。惡の反對。道理、品行などのよきこと。例 善行。善言。善政。善意。善良。善心。すぐれて、よきこと。又、德性の賢りたるにも用ゐる。例 良夜。良月。良工。良器。改良。賢良。良知良能。良馬。善良。溫良。賢良。醜の反對。形貌の美麗なるをいふ。それより他にも廣く用ゐる。例 好例。好風景。好風俗。好時節。好天氣。好意。好人物。善、美、樂の意を有す。例 嘉木。嘉禾。嘉辰。嘉令。美、好の意。例 佳人。佳氣。佳境。佳勝。佳辰。佳良。凶の反對。めでたきこと。例 吉凶。吉慶。吉報。吉日。善和なる意。婦人の善良柔和の德あるをいふ。例 淑德。淑女。貞淑。

【よぶ】

呼喚 呼喚。遠きにある者を、聲をあげてよび寄すること。又單に聲を立てゝわめくこと。例 呼號。呼聲。歡呼。喧呼。寐ねたる者を呼び覺すが如く、急に大聲を發して呼ぶこと。例 喚起。喚聲。叫喚。招喚。

【よむ】

讀誦諷詠 讀誦。諷詠。

讀 目に見て、口にとなふること。例 音讀。精讀。多讀。

誦 そらよみをすること。例 諳誦。背誦。

諷 節をつけてうたふこと。但し歌の如く、樂器に合せてうたふものには非ず。例 諷誦。吟諷。

咏 詠の字と通用す。よむと、うたふとの間にて、唱といふに近し。詩を作ることにも轉用す。例 吟咏。

【より】

自 自由。道。從。

由 「カラ」「ソレカラ」などいふ意。所從來也と註す。例 晨門曰、奚自、子路曰自孔子、論語。禍自此始矣、蕭何の傳。自是威震西域、後漢書。

道 署自に似たり、されど自は「手本ヨリ」、由は「手筋ヨリ」の意に用ゐらる。例 樂由中出、禮自外作、樂記。迷國罔上、近由君始。黃帝因之以紀事、虞舜由之而作歌、韓文。由之觀之。道は通行人の、必ずたより行くものなれば、「ヨリ」の意に轉用す。例 風道北來、山海經。樗里疾已道穴聞之矣、韓非子。

從 就也、順也と註す。自の根源を示すに對して、經歷せる中間の順路を示す意あり。例へば從古以然とある時は、古より今までの間をいへるなり。又自と同樣に用ゐることも多し。例 危國者、從此入始也、五行志。從今以往。從古以來。

【よる】

夜 晝の反對。日の入より、日の出づるまでの間。例 終夜。徹夜。夙夜。通夜。

宵 日の暮れて、暗くなりたる時にて。夜の未だ更けぬ間をいふ辭なれど、終宵。徹宵など、夜と同一に用ゐたる例多し。

【よる】

因 因依。因據。因賴。因倚。因寄。因憑。因緣。仍。

依 源因を見て、手掛りとすること。それにつきての意。例 因果。因緣。志孝道に存す、故に孔子之に因りて以て孝經を作る。

據 依賴と連用して、よりすがること。力とたのむこと。例 草木の生ずるは、土に依る。

賴 固守の意にて、物を執へて離れず、よりどころとすること。例 本據。根據。據無し、城に據る。嶮に據りて固守す。

頼　たのみとしてそれによること。又は貴下の御蔭でなどいふ意。例豪傑の士あれば、國頼つて以て興る。四海凱安なるは、一に君の德に頼る。

倚　物によりかゝること。例門に倚りて望む。

寄　たよりにして、そなたにつくこと。例寄留。寄寓。寄託。

憑　もたれかゝること。例几に憑る。檻に憑る。軾に憑つて觀る。椅子に憑る。

凭　憑に同じ。

縁　つきまはる、よりそふの意。例木に縁りて魚を求む。此の災異の縁つて起る所なり。

仍　「カサナル」、とも「シキリニ」、とも訓む。一事件を爲し、又更に一事件をすること。帝齊を平げ、仍つて關洛を定むる意あり。

【よろひ】

甲　甲冑。

鎧　よろひなり。但し首鎧といふ時は、「カブト」の義となる。

介　鱗甲ノ甲ナリの義より轉じて、身をかたむるよろひのことゝす。例甲冑。鱗介龜、蟹ナドノ鱗甲アル蟲類の義より轉じて、身をかたむるよろひのことゝす。例介冑。

函　元來「ハコ」と訓む字なり。はこの中に物を入るゝが如く、身を包み固むるが故に、よろひの義に轉用す。

【よろこぶ】

喜　喜悅。歡欣。怒、悲、憂の反對。うれしく樂しく思ふ意。例喜怒、色に顯はさず。喜悅。喜色滿面。喜憂。悲喜。

悅　心の底より、樂しくうれしく思ふこと。「說」と書くも同字なり。例中心悅服す。悅樂。喜悅。

歡　よろこび樂みて、笑ひ語る意。「懽」「驩」皆同じ意なり。例歡迎。歡喜。歡樂。

欣　よろこびの情面にあらはれて。氣のうき立てる意。「忻」「訢」共に同字なり。例欣々然。欣然。欣慕。欣舞。

怡　和樂の貌にて、「ニコニコ」として、悅びの顏色に顯はれたるをいふ。

懌　長くよろこぶ意。例悅懌。先王の命を受けしを懌ぶ。

愉　よろこびて顏色の和ぐこと。例愉色。

らの部

【らる】

被　見　所　爲

被見所爲

受動の辭にて、人にかぶせらるゝこと。受身の辭ともいふ。寢衣也と註し、衣を被る義より轉じたるなり。例不被用。以萬乘之國被圍、魯仲連の傳。信而見疑、忠而被謗、屈原の傳。

見らるゝの義にて、被よりは意輕し。例某見過。見教。見以爲迂遠而闊於事情、孟軻の傳。四夷交侵以弱見奪。

爲の字と、語を插みて用ゐる字なり。されど又單獨にも用ゐらる。例所親厚。黃歇見焚懷王之爲秦所誘、春申君の傳。

被也と註す。多くは所の字と語を插みて用ゐる。例爲人所推許。爲人推許。身爲禽於中原。

わの部

【わかし】

若　少　弱　壯　夭　嫩

若少弱壯夭嫩

「モシ」「シク」「ゴトシ」「ナンヂ」「シタガフ」等の訓はあれども、少弱の意なければ此を「ワカシ」と訓むは誤りなり。老若。若者など書くは違へりといふべし。

若音ジヤクなれば弱の音の同じきより、ふと誤り來れるにや。

唯年のすくなきこと。例少年。少壯。年少。

男子の二十歲に達せる稱。例弱輩。弱年。弱冠。幼弱。弱齡。

男子の三十歲に達せる稱。例壯年。壯夫。勇壯。

未だ壯年に達せざるをいふ。例夭折。夭死。

樹木などのわかきこと。「嫩」の俗字なり。例嫩葉。嫩芽。

【わかつ】

分　別

分別

合の反對。別々に物をわくること。例分布。分配。分業。分解。分袂。分散。分合。

分割。天下を三分す。

辨別又は差別などの意にて、混雜せぬやう、此は此、彼は彼と區別する意。例特別。格別。別狀。別段。別懇。別邸。別莊。別物。別冊。

判　半分に切りはなつこと。例 判断。判決。剖判。審判。判定。裁判。

頒　分ちて與ふること。例 頒布。佛典を塞外に頒つ。

班　頒と音義相同じ。

訣　生別れ又は死別れの意。例 永訣。訣別。

【わく】

涌　水の池中より噴出すること。例 涌出。

沸　湯の煮えかへること。湯のだぎること。例 沸騰。煮沸。

洶　わきかへり、わきあがること。例 洶涌澎湃。文選。

【わざはひ】

禍　福の反對。不仕合なること。不幸にあふこと。

災　思ひもよらぬ不時の不仕合をいふ。例 災難。天災。火災。水災。

殃　神の咎めをいふ。例 餘殃。

眚　身のうへに災難の生ずること。例 災眚竝び至る。

【わする】

遺忘　思はず心に取落すこと。例 遺失。遺忘。遺尿。記憶を失ふこと。例 忘失。忘却。忘年會。

【わたる】

渡濟　渡濟。水をわたること。船にても徒歩にても、海、川、廣狹に係らずいふ。例 衆生濟度。濟生。救濟。

涉　己わたるにも、人をわたしてやるにも用ゐる。

亙　淺き水を徒歩にてわたる意。それより書籍をざっと博く見るにも、人の世話を少しばかりするにもいふ。例 徒涉。博涉。涉獵。干涉。跋涉。

彌　此方より彼方まで到達すること。例 赤虹天に亙る。連亙。

【わつか】

僅　不足なく遍く行きわたる意。例 曠日彌久。

纔　僅才財裁　何物にても、數量の少きこと。「チツトバカリ」の意。例 僅少。僅々。絲を染むるに、幾度も色水に入るゝ、その最初一度入れたるばかりのことにて、「チヨット」「ヤット」などの意。例 高祖死して纔に三年。春に入つて纔に七日。

才

【わらふ】

笑　哂　嗤　咲　咍　莞

は「財」「裁」と共に、音義皆同じく、纔の意に通用せらる。

笑哂嗤咲咍莞

をかしき事ある時、口を開きて笑事。例冷笑。失笑。大笑。微笑。哄笑。花笑ふ。歯をあらはすほどに、にっことわらふこと。微笑の意なり。例夫子哂之、論語。嘲りわらふこと。例愚者愛惜費、但爲後世嗤、文選。花唇の開くこと。莟のひらくこと。咲は「笑」の古字なり。嘲りわらふこと。

莞　少しくわらふこと、ほゝゑむこと。例夫子莞爾　笑曰、論語。

【われ】

我　吾　余　予

我吾余予

彼に對していふ語にて、自身のこと。例我國。我慾。彼我。人我の相。物我。唯我。

我は相待の言なれども、吾は絶待の言にて、相對する者なく、我邦といへば、外國に對していふ意なれども、吾國といふ時は、自身の國を重く稱せるにて、對比する國なく、外國を眼中に置かぬ意あり。例吾國は神國なり。我善く吾浩然の氣を養ふ。彼は其富を以てし、我は吾仁を以てす。彼は其爵を以てし、我は吾義を以てす。

吾の意に近し、唯自稱代名詞に用ゐられて、我吾の如く形容詞的修飾語（我國、吾國等）には用ゐられず。

音義共に余に同じ。

國漢文及作文 **類字鑑** 終

附錄

- 漢字類字辨
- 漢字熟語用例辨
- 正字俗字辨
- 和字異歌辨
- 國語假字遣大要
- 字音假字遣大要

漢字類似辨

左に字形の類似せるために、誤用し易き文字を擧げ、括弧内には訓方及び熟語を記す。但し、稀には場「バショ」の如き音も交れり。

哀　暗　溢　　揖　酉　因　厭

哀（カナシム、アハレム。悲哀）衰（オトロフ。衰弱）衷（ウチ。折衷）

暗（ヤミ、クラシ。暗夜）諳（ソランズ。諳記、諳誦）

溢（アフル。漲溢）縊（クビル。縊死）謚（オクリナ。謚號）鎰（メカタ。黄金百鎰）

隘（セマシ。狹隘）

揖（アイサツ。長揖、相揖）楫（カヂ。舟楫）

酉（トリ）酋（ヲサ。酋長）

因（ヨル。原因）困（クルシム、コマル。困卻）

厭（イトフ、アク。厭忌、厭惡）壓（オス。壓制、抑壓）

幼　嗚　億　勘　嶽　幹　槁　庚　干　喙　衙　綱

幼（ヨサナシ。幼稚）　幻（マボロシ。夢幻、幻燈）
嗚（ナゲク。嗚呼）　鳴（ナク、ナル。月落烏鳴、鳴動）
億（カズ。億兆）　憶（オモフ、シルス。記憶）　臆（ムネ。胸臆、臆病）
勘（サダム。勘定）　堪（タフ。堪忍、堪能）
嶽（タケ。富嶽、登嶽）　獄（ヒトヤ。地獄、監獄）
幹（ミキ、モト。根幹、幹事）　斡（マロブ、カケマハル。斡旋）
槁（カル、。形容枯槁）　稿（シタガキ。草稿）
庚（カノエ。庚申）　康（ヤスシ。健康、安康）
干（アヅカル、ソコバク。干渉、干與、若干、干戈）　于（オイテ、ニ。十有五而志二于學一）
喙（クチバシ。容喙）　啄（ツイバム。啄木鳥）
衙（政事ヲスル役所。官衙）　衞（マモル。衞生）
綱（ツナ。綱紀、綱領）　網（アミ。天網、蛛網）

緘　記　詰　畜　疆　義　技　嚮　仰　己　宜　快

緘（トヅ。封緘、緘默）　鍼（ハリ。鍼療）
記（シルス、シル。記念、書記、記憶）　紀（シルス、ノリ。紀元、紀綱、紀行）
詰（ナジル、ツメル。詰問、詰所）　誥（ツゲル。誥文）
畜（カフ、ヤシナフ。畜類、畜生）　蓄（タクハフ。貯蓄）
疆（ツヨシ、シフル。勉疆）　疆（サカヒ、カギリ。疆界）
義（ヨシ。仁義）　義（イキ。伏羲氏）
技（ワザ。技藝、技術）　枝（エダ。枝葉）
嚮（サキ、ムカフ。對嚮）　響（ヒビキ。音響）　饗（モテナス。饗應）
仰（アフグ。俯仰、仰天）　抑（オサフ、ソモソモ。抑壓、抑損）　迎（ムカフ。迎謁）
己（オノレ。自己）　已（スデニ、ヤム。已然言、不得已）　巳（ミ、辰巳、巳の時）
宜（ヨロシ。便宜）　宣（ノブル。宣言、宣旨）
快（コヽロヨシ。快樂）　怏（コヽロヨカラズ。怏々不樂）

冠　勸　科　群　獲　官　頃　檢　遣　建　警

冠（カンムリ。衣冠、冠位、弱冠、冠冕）冠（アダ。外冠）
勸（スヽム。勸誘）歡（ヨロコブ。歡喜、歡迎）觀（ミル。觀察）
科（シナ。學科）料（ハカル。料理）
群（ムラガル。群集）郡（コホリ。郡縣）
獲（ウル。捕獲）穫（カル、トリイレル、ヨサム。收穫、秋穫、耕穫）護（マモル。守護、保護）
官（ツカサ。官職、任官）宦（ミヤヅカヘ。仕宦、宦官）
頃（コロ、田百畝ノ稱。頃日。千頃）項（イタダキ。項上）項（ウナジ、クビ。事項）
檢（シルス、カンガフ。檢定）驗（シルシ、コヽロミル。試驗）
遣（ヤル、ツカハス。派遣、遣唐使）遣（ノコス、オクル、ワスル。遺言、遺失）
建（タツ。建築、建國）健（スコヤカ。健康、健全）鍵（カギ、合鍵）
警（シハブキ。警咳）警（ニホフ）

擊　挾　減　刑　卿　穀　侯　墾　忽　察　采

擊（ウツ。攻擊）繫（ツナグ。繫縛、繫留）
挾（ハサム。挾擊）狹（セマシ。狹小）
減（ムル。減少）減（ホロブ。減亡）
刑（ツミス。刑罰）形（カタチ。形影）
卿（キミ、ナンヂ。公卿）鄉（サト。鄉里）
穀（米ノタグヒ。五穀）殼（カラ。貝殼）轂（車ノコシキ。輦轂）
侯（キミ。侯伯、諸侯）候（ウカガフ、サフラフ。氣候、伺候）
墾（タガヤス。開墾）懇（ネンゴロ。懇切、懇親）
忽（タチマチ、ユルカセ、カロンズ。忽然、輕忽）忽（イソガハシ。忽々）
察（カンガフ。視察）際（キハ。分際。際限）
采（イロドル、カタチ、トル。五采、風采、采薪ノ疾）彩（トル、ツヤ。彩色、光彩）
採（トル、採集）菜（ナ。野菜）

操　削　栽　　塞　坐　刺　衝　鍾　且　茸　幟

操（トル、アヤツル、ミサヲ。操練、節操）繰（クル。手繰ル、繰合ス）

削（ケヅル。添削、削減）删（ケヅル。删修）

栽（ウウル。栽培）裁（タツ、サク、ワカツ。裁縫、裁判）截（タツ、キル。截斷、直截）

載（ノス、トシ。乘載、千載）戴（イタダク。頂戴）

塞（ヘダヽル、サカヒ、フサグ。閉塞）寨（トリデ）

坐（スワル、ヰナガラ。端坐、坐食、坐睡）座（ヰドコロ。座敷、高座）

刺（サス、コロス。刺殺、刺客）刺（モトル。潑刺）

衝（ツク。衝突）衡（ハカリ。權衡）銜（クツワ。馬銜）

鍾（アツマル、ヤシナフ。鍾愛）鐘（ツキガネ。警鐘、梵鐘）

且（カツ、シバラク。苟且）旦（アシタ。詰旦、明旦）

茸（クサムラ、タケ、シゲル。蓊茸、蒙茸）葺（屋ヲフク）

幟（ノボリ、ハタ。旗幟）熾（サカン。熾盛）識（シル、シルス。知識）織（オル。織

暑　渉　祇　屣　持　熟　壤　侍　商　侵　帥

物）

暑（アツシ。暑氣）署（ツミ、ツカサ。警察署、部署、署名）

渉（ワタル。跋渉、徒渉）陟（ノボル。登陟、黜陟）

祇（ツヽシム祇候）祇（クニツカミ。神祇）

屣（クツ。弊屣）屐（アシダ。高屐）

持（モツ。捧持）特（コトニ、ヒトリ。特別）

熟（ウム、ツラツラ。熟練）塾（イヘ、マナビドコロ。家塾）

壤（コエツチ。壤土）壞（ヤブル。破壞）

侍（ハベル、サムラヒ。侍講、侍史）待（マツ、アシラフ。待遇、接待）

商（アキナフ。商賣、商標）商（モト「本」、ヤハラグ）

侵（ヲカス。侵入）浸（ヒタス。漬浸、涵浸）

帥（ヒキヰル。將帥、元帥）師（イクサ、モロモロ、ヲシフル人。師團、師旅、師匠）

遂　**掣**　**籍**　**折**　**宵**　**梢**　**潟**　**鎖**　**隻**　**姓**　**祖**　**淘**

遂（ツヒニ、トゲ。遂行）遂（オフ。驅逐）

掣（ヒク、掣肘）製（ツクル。製造）

籍（カキモノ。書籍）藉（ムシロ、シク、ススム。狼藉、慰藉）

折（ヲル。折半、折衷）析（ワカツ。分析）柝（ヒヤウシギ。擊柝）

宵（ヨヒ。今宵）霄（ソラ。霄壤、雲霄）

梢（コズエ。樹梢）稍（ヤヤ）

潟（カタ。新潟、八郎潟）瀉（カタブクル、吐瀉、一瀉千里）

鎖（キエル、ケス。銷磨、銷夏）鎖（トザス、クサリ。封鎖、鐵鎖）

隻（カタカタ、ヒトツ。隻眼、敵艦一隻）雙（フタツ。一雙）

姓（ウヂ。姓名、百姓）性（ウマレツキ。性質）牲（イケニヘ。犧牲）

祖（オヤ。皇祖、先祖）租（ミツギ。租稅、地租）粗（アラシ。粗末、粗笨）

淘（スグル、淘汰）陶（スエモノ。陶器）

隋　**態**　**膽**　**棹**　**茶**　**澤**　**彈**　**段**　**飭**　**陣**　**帙**

隋（ヲコタル。怠隋）隨（シタガフ。隨行、隨意）墮（オツル。墮落）

態（ナリフリ。態度）熊（クマ）

膽（キモ。大膽。膽略）瞻（ミル。瞻望、仰瞻）贍（タル。富贍）

棹（サヲ。桂棹）掉（フルフ。尾大不レ掉）

茶（チヤ。茶屋。茗茶）荼（ニガナ。茶毒）

澤（サハ。沼澤）擇（エラム。選擇）鐸（大ナル鈴。木鐸）繹（ノブル。人馬絡繹）

驛（ツジウマ。驛馬）

彈（ハヌル。彈力、彈丸）憚（ハバカル。忌憚）驒（スグレタル馬。飛驒國）

段（キリ。階段、此段）叚（カリ。假に同じ）暇（イトマ。間暇）

飭（ツツシム。戒飭）飾（カザル。裝飾）

陣（ツラナル。陣營）陳（ノブ、フルシ。陳述、陳腐）

帙（フミヅツミ。書帙）秩（ツイデ、フチ。秩序、秩祿）跌（ツマヅク。蹉跌）

迭（カハル。交迭）

釣（ツル。釣魚）鈞（三十斤ノ重サ。一髮千鈞ヲ引ク）鉤（カギ）均（ヒトシ。平均、均等）

低（ヒクシ。高低）抵（イタル、オホムネ。大抵）

延（タヒラカ。朝延）延（ノブ、ヒク。延引、遷延）

荻（ヲギ）萩（ハギ）

詔（ヘツラフ。諂諛）韶（ウタガフ）

第（イヘ、ツイヅ。第宅、第一）弟（オトウト。兄弟、弟子）

挺（ヌキンズ。挺身、挺進）梃（ツヱ）

哲（モノシリ。先哲、哲學）晳（アキラカ、シロシ。明晳、白晳人種）

兎（ウサギ。兎角）免（マヌカル。免許）兎と書くハ俗字。

徒（トモガラ、イタヅラ、タダ。生徒、徒歩）徙（ウツル。移徙）從（シタガフ。從順、從容）

怒（イカル。憤怒）恕（ユルス、オモヒヤリ。容恕、寛恕）

場（バシヨ。馬場、演劇場）場（サカヒ。疆場）

覇（カシラ。一番、王覇、覇權）羈（タビ。羈旅）羈（ホダシ。羈絆、羈束）

貝（カヒ、梵貝）具（ソナフ、ツブサニ。具申）

倍（マス。數倍、倍蓰）培（ツチカフ。培養）陪（クハフ、マス、カサヌ、ツキシタガフ、ハベル。陪席、追陪、陪從）

買（カフ。賣買）賈（アキナヒ、アタヒ。商賈）

癈（スタレヤマヒ。癈疾、癈兵院）廢（スタル。廢止、廢墟、廢物）

斑（マダラ、斑白）班（ワカツ、ツイヅル。天地剖班、班別、班次）

枚（エダ、カズ。枚擧）牧（マキ。牧馬）

派（エダナガレ。流派、派出）脈（スヂ。血脈）

背　背（セ、ソムク。違背）脊（セナカ。脊髓）

妨　妨（サマタゲ。妨害）防（フセグ。防禦）

判　判（ワカツ。裁判、判定）叛（ソムク。叛逆）

敏　敏（トシ。敏捷）誨（ヲシフ。訓誨）

貧　貧（マヅシ。貧窮）貪（ムサボル、貪婪、貪慾）

微　微（カスカ、スクナシ。衰微）徵（シルシ、メス。徵候、徵兵）徽（ハタジルシ。徽章）

　　徽（クロシ。徽菌）

未　未（ヒツジ、イマダ。未明）末（スエ。末葉、末子）

錨　錨（イカリ。拔錨）描（ウツス。描寫）鈿（カンザシ。螺鈿）

微　微（スクナシ、チヒサシ。微細、微塵）徵（メス。徵發、徵證）

傳　傳（カシヅク、敎ヘ人。師傳）傳（ツタフと訓む。傳達、傳聞）

俯　俯（フス。俯伏、俯瞰）附（ツク。附帶、附庸福小ノ國）腑（臟腑）

復　復（マタ、フタタビ、カヘル。往復）複（カサナル。重複、複雜）

弊　弊（ヤブル。弊害、弊政）幣（ヌサ、ニギテ、ゼニ。幣帛、奉幣使、貨幣）蔽（オホフ。隱蔽）

辨　辨（ワカツ、ワキマフ。辨別）瓣（アキラカ、言巧ミ。辯舌、辯護）瓣（花ビラ）

　　辯（クム、マトウ。辯髮）

聘　聘（ヨブ。招聘）騁（ハセル。馳騁）

瓢　瓢（フクベ、ヒサゴ。瓢簞）飄（ヒルガヘル。飄然）

陛　陛（キザハシ。陛下）陛（ノボル。陛敍）

壁　壁（カベ、トリデ。墨壁）璧（タマ。夜光ノ璧）

敝　敝（ヤブル。敝衣）廠（ウマヤ。砲兵工廠）

戊　戊（ツチノエ。戊申詔書）戌（マモル。衞戍病院）戌（イヌ。丙戌の歲）

俸　俸（タマモノ。俸給）捧（ササグ。捧呈）棒（棍棒）

募　募（ツノル、モトム。募集）暮（クレ、クル。薄暮、日暮）

模　模（カタチ、イガタ、ノツトル。規模、模型）摸（ナラフ。摸案、摸範）

簿　簿（帳簿、薄記）薄（ウスシ。薄弱）

摩　摩（ミガク、スル。按摩、摩擦）磨（ミガク、トグ、スリウス。琢磨）

漫　漫（ミダリ。漫然、爛漫）慢（アナドル。傲慢、緩慢）

密　密（ヒソカ、チカヅク。秘密、親密）蜜（ハチミツ。蜜蜂）

明　明（アク、アキラカ。天明、明月）朋（トモ。朋友）

綿　綿（ワタ、ツラナル。連綿）錦（ニシキ。錦衣）

冶　冶（キタフ。冶金、陶冶）治（ヲサム。政治、治療）

容　容（カタチ、ユルス、イル。容貌、許容、内容）客（マラウド。賓客、旅客）

勞　勞（ツカル、ツトム。功勞、慰勞）塋（ハカドコロ。先塋）榮（サカユ。繁榮）熒（ヒカリ、カガヤク。熒惑）滎（コミヅ。滎陽）煢（ヒトリ、ウレフ。煢獨）

裏　裏（ウラ。裏面）裏（ツツム。包裏）

梁　梁（ハシ、ウツバリ、ヤナ。橋梁）粱（アハ、粱粟）

慮　慮（オモンパカル。考慮）虜（トリコ。捕虜）虞（オモンパカル）。

綠　綠（ミドリ。綠樹）緣（シタガフ、ヨル、フチ。因緣、緣故、緣起）椽（タルキ）

李　李（スモモ。桃李不言）季（スエ。澆季、季子、四季）

羸　羸（ツカル。羸弱）贏（カツ、アマリ。輸贏）

獵　獵（カリ。漁獵、獸獵）蠟（ラフソク。蠟燭）臘（年末ノ祭事ニテ、十二月ノ異名トス。臘月）

斂　斂（ヲサム、アツム。聚斂）歛（コフ、ムサボル。歛慾）

漢字類似辨 終

漢字熟語用例

左記の『是』の部は、慣用あり、典據ある文字にして、『非』の部は意義の類似せるより混用せるものなれば、使用せざるを可とす。

是	非
諳誦	暗—
因襲	—習
一斑	—班
意志	—思
位置	—地
臆測	憶—
改善	—良
學科	—課
效果	—菓
夏季	—期
覺悟	—期
簡單	—短
干渉	關—
伎倆	—量
	伎技通用す
規律	紀—
希望	冀—
汽車	氣—
機運	氣—
機關	器—
徽章	紀—記—
器械	機—

是	非
氣概	―慨
記憶	―臆
規模	―摸
關係	―干 ―繫
欵待	―歡
觀念	感念
課業	―科
緩慢	―漫
協同	―共
缺席	―欠
研究	―窮

是	非
檢査	―撿
結局	―極
原因	―源
根柢	―底
講和	―媾 ―交
言語道斷	―同
相當	―等
相違	―異
唱道	―稱 ―導
首唱	―主
深切	―親

是	非
信仰	―向
狀態	―情
刺擊	―激 ―戟
旨趣	―趣 主旨
趣意	―主
思想	―志
眞誠	―正
自動	―働
莊嚴	―壯
搢紳	縉―
常磐	―盤

是	非
十分	充―
情況	狀況
需要	―用
時候	―侯
社會	―界
囑託	―托
諸侯	―候
障礙	―害 礙碍通用ス
揣摩	―磨
推薦	―選 ―撰
成功	―效
擊肘	―制

是	非
銷夏	消―
撰述	―選
選擧	―撰
成績	―蹟
專制	―擅
招待	―請
端坐	―座
單獨	―特
臺灣	―台
對抗	―向
鍛錬	―練 ―煉
淘汰	―陶

是	非
知識	智―
駐箚	―紮 ―刹
丁寧	叮―
鄭重	―丁
癈疾	―廢
廢學	―癈
發揮	―輝
賠償	倍― 陪―
反映	―影
俳諧	―誹
妨害	―防
必要	―用

(是)	(非)
畢竟	必—
複雜	復—
敷衍	—布—
編輯	—演
併用	—集
補助	並—
奉讀	輔—
	捧—

(是)	(非)
摸範	模—
明瞭	—亮
濫用	亂—
理會	—解
聯合	連—
禮義	—儀

漢字熟語用例 終

正字俗字辨

鶯と鸎　兩字相通用す。

奥と奧　奥(アウ オウ)おく。おくふかし。奥と書くは誤字。懊、襖等も類推すべし。

庵と庵　庵(アン オン)小き草舍。いほり。庵と書くは誤字。

頤と頤　頤(イ)おとがひ。頤と書くは俗字。

醫と醫　兩字相通用す。

淫と淫、淫　淫(イン)みだる、うるほす。淫、淫は共に誤字。

鬱と鬱　鬱は音ウツ、訓シゲル。鬱と書くは俗字。

穎と頴　穎(エイ)さき。ほ。頴と書くは俗字。

衛と衛　衛(エイ エ)まもる、くにざかひ。衛は俗字。衛、衛は共に誤字。

鹽と塩と塩　鹽は音エン。訓シホ。塩は鹽に同じ。塩は俗字。

園と園　園（エンテン）りの。　園は誤字。遠、圜も類推すべし。　袁とは異なり。

幼と幼　幼（イウエウ）いとけなし。　幼と書くは誤字。

溫と温　兩字共様に用ゐる。音ヲン、訓イデユ、オダヤカ、アタタマル、タヅヌなど。

角と角　角（カク）つの。かご。　角は誤字。

學と學　學（ガク）まなぶ。　學誤字。覺、覺、等も類推すべし。　譽とは異なり。

尻と尻　尻（カウコウ）しり。　尻は誤字。

看と看　看は看の俗字。

函と函　函（カンゴン）いる。はこ。　函は俗字。

陷と陷　陷（カン）おちいる。　陷は誤字。

刈と苅　刈（ガイグ）かる。けづる。　苅は誤字。

解と解、と解　解（カイゲ）とく。　解、解共に誤字。

屆と届　屆は音カイ、ケイ、訓イタル、キハム、トドク。　届と書くは俗字。

衡と衡　衡（カウギヤウ）はかり。よこ。　衡は誤字。

礙と碍　礙（ガイゲ）さへぎる。ささふること。　碍は俗字。

含と含　含（ガンゴン）ふくむ。　含は誤字。

巖と岩　岩ハ嵒の俗字、俗に巖の省字とす。

翰と翰　翰（カン）文書。たかし。　翰は誤字。

閒と間　閒は音カン、訓アヒダ。　間と書くは、閒の俗字。

羹と羹　羹（カウキヤウ）あつもの。　羹は俗字。

囂と囂　囂（カウゴウ）かまびすし。　囂は誤字。

戛と戛　戛（カツケチ）ほこ。する（轢）。　戛は俗字。

況と況　況音キヤウ。訓タトフ、マシテ、アリサマ、タマフなど。　況は況の俗字。

虛と虛　虛（キヨコ）むなし。うら。　虛は誤字。

笻と筇	笻は音キヨウ、訓ツエ(竹杖)。筇は笻の俗字。
伎と技	伎は伎倆と連用し。技は末技、長技、技藝など連用す。伎と技とは通じても用ゐる。
奇と奇	奇は奇の俗字。寄、倚、椅、崎、騎等も類推すべし。
戲と戯	戲は音ギ、訓タハムル。戯は戯の俗字。
毀と毀と毀	毀やぶる。りしる。毀、毀は共に誤字。
競と競と竟	三字共に相通用す。
危と危	危あやふし。危は誤字。厄、脆、詭等も類推すべし。
器と器	器は器の俗字。
今と今	今いま。今は誤字。
郤と却	郤は音キヤク、訓シリゾク、カヘリテなど。却と書くは俗字。
徽と徽	徽よし。はたじるし。徽は誤字。
棊と棋と碁	三字共に相通用す。

究と究	究きはむ。竟ふ。究は誤字。
恭と恭	恭つつしむ。うやうし。恭は誤字。
恐と恐	恐おそる。恐は誤字。
驅と駈	兩字相通用す。
具と具	具ぐうなふ。つぶさ。うつは。具は誤字。俱、椇等も類推すべし。
囘と回	兩字共に同じ。音クワイ、訓メグル。囘と書くは俗字。
寛と寛と寛	寛ゆるやか。ひろし。寛、寛は共に誤字。
怪と恠	恠は怪の俗字。
黄と黄	黄きいろ。黄は誤字。
畫と畫	畫ゑ。かぎる。畫は俗字。
鶴と鸛	兩字相通用す。
館と舘	館は音クワン、訓タチ、タテ、ヤカタなど。舘と書くは俗字。

勳と勲、勲　勳（クン）いさをし。　勲、勲は共に俗字。

擊と擊　擊（ゲキ キヤク）うつ。　擊は誤字。

決と決　決音ケツ、訓キレル、サダマル、キマル。　決と書くは俗字。

絅と綱　絅（ケイ）ひこへもの。　綱は誤字。

逕と徑　逕音ケイ、訓コミチ。兩字音訓相同じ。

慶と慶　慶（ケイ キヤク）よろこび。いはふ。　慶は誤字。

攜と携と携　攜音ケイ、訓タヅサウ。　携、携と書くは俗字。

卿と卿　卿（ケイ キヤウ）朝廷の上官。天子の臣下を呼ぶに用ゐる稱。　卿は誤字。

鷄と雞　兩字相通用す。

欠と缺　欠（ケン）あくび、（欠伸）。　缺（ケツ）かぐ、（缺席）。

減と減　減は音カン、ゲン、訓ヘル。　減と書くは俗字。

兼と兼　兼（ケン）かぬ。ふたつながら。　兼は誤字、嗛、嫌、謙、鎌、廉等も類推すべし。

教と教　教は音ケウ又はカウ、訓ヲシフ。　教ハ俗字。

隙と隙　隙（ゲキ キヤク）ひま。　隙、隙は共に誤字。

決と決　決（ケツ ケチ）きむ。わかる。　決は俗字。

叫と叫　叫音ケフ、訓サケブ。　叫は叫の俗字。

協と協　協（ケツ）かなふ。やはらぐ。　協、協共に誤字。

卷と卷　卷（ケン）まく。かがまる。　卷は誤字。倦、捲、蜷等も類推すべし。

獻と献　獻は音ケン、訓タテマツル。　献と書くは俗字。

原と原　原（ゲン グワン）はら。もと。原は誤字。源、愿等も類推すべし。

彦と彦　彦（ゲン）男子の美稱、ひこ。　彦、彦共に誤字。諺、顔、産等も類推すべし。

劒と劍　兩字相通用す。

袴と袴　袴（コク）はかま。　袴は誤字。

鼓と皷　鼓は音コ、又は、グ、訓ツヅミ。皷と書くは俗字。

厚と厚　厚（コウ）あつし。あつさ。厚は誤字。

吳と呉　吳（ゴグ）大なり。かまびすし。呉は俗字、娛誤等も類推すべし。

黑と黒　黑と書くは俗字。

構と搆　構は音コウ。訓カマフ、クミタツ。搆音コウ、牽く意にも、搆搗（コウドウ）と連用して、事を解せず、くらき意にも用ゐらる。

功と功　功（コウク）いさを。事業。功は誤字。

箇と個　箇は音カ、物事を數ふるに用ゐる字。個は元（モト）个に同じく、个の意味は箇に同じ。

寇と寇、寇　寇（コウク）あだ。りこなふ。寇は俗字。寇は誤字。

恆と恒　恆は音コウ、訓ツネ。恒と書くは俗字。

瑣と瑣　瑣（サ）ちひさし。くづ。瑣は誤字。

坐と坐　坐（ザ）すわる。りぞろに。坐は誤字。

桑と桒　桒は桑の俗字。

讒と讒　讒（サンザン）りしる。うつたふ。讒は誤字。

讚と讃　讚は音サン、訓ホム、タスク。讃と書くは俗字。

贊と賛　贊は贊の省字。

册と冊　册は音サク。詔勅、文書、典籍等をいふ。今普通に冊と書すれども、冊と書くを正しとす。

齋と斎　齋（セイサイ）もたらす。おくる。齋は誤字。

顋と腮　顋（サイ）あぎと。腮は俗字。

雙と双　雙は正字にて。双と書くは俗字。

喪と喪　喪（サウ）うしなふ。ほろぶ。喪、喪共に誤字。

傘と傘　傘（サン）からかさ。あまがさ。傘は誤字。

爽と爽　爽（サウ）あきらか。さわやか。たがふ。爽は誤字。

窗と窓　窗音サウ、訓マド。窓は窗の俗字。窓は窗の俗字。

漆と漆　漆（シツ）うるし。漆は誤字。

象と象　象は音シヤウ、又はザウ。象と書くは俗字。

貳と貳　貳（ジニ）二に同じ。ふたつ。貳、貳共に誤字。

盡と盡　盡は盡の誤り。儘、燼、贐等も類推すべし。

收と收　收は收の俗字。

者と者、　者（シヤ）もの。は。者と書くは誤字。煮、都、著、緒、諸、渚、箸等類推すべし。

承と承　承（シヤウ）うく。うけたまはる。承は誤字。

牀と床　床は牀の俗字。

舍と舍　舍（シヤ）やどり。いへ。舍は誤字。

將と將　將（シヤウ）まさに。軍のかしら。將は誤字。

昇と昇　昇（シヤウ）のぼる。昇は誤字。

鍼と針　針は鍼の俗字。

眞と真　真は眞の俗字。

卽と即　卽（ショク）つく。すなはち。即、卽共に俗字。唧、節、櫛等も類推すべし。

絲と糸　絲は音シ、訓イト。糸は音ベキ、訓ホソイト。世に糸を以て絲の省字として同様に用ゐれども、全く音訓を異にせる別字なれば注意すべし。

辭と辞　辭は辭と通用す。辞は辭の俗字。

準と准、準　準（シユン ジユン）のり（法）。たひらか。准は俗字。準は誤字。

術と術　術（シユツ ジユチ）わざ。てだて。術は誤字。

處と處　處（ショ ソ）をる。ところ。處は俗字。

寫と寫　寫（シャ）うつす。　寫は誤字。

出と出　出（シュツ スイ）いづでる。外へ致す。　出は誤字。咄、屈、拙等も類推すべし。

嘗と嘗　嘗は音シヤウ、訓ナム、ココロミル、カツテなど。　嘗と書くも嘗に同じ。

稱と稱　稱（ショウ）はかる。こなふ。稱は俗字。

柿と柿　兩字共にカキと訓めども俗字なり。　柿と書くを正しとす。　柿の音シなり。

從と從　從は音シヨウ、又はジユ、訓シタガフ。　從と書くは俗字。

晉と晉　晉（シン）ススム。又國名。　晉は俗字。　晉は誤字。

旨と旨　旨は旨の俗字。

兒と兒　兒（ジニ）こ。わかもの。　兒は俗字。

敍と敘　敍は音ジヨ、訓ツイテ、イトグチ、ノブなど。敍一に敘と書くも同字

なり。敘と書くは俗字。

屬と屬　屬は音シヨク、又はゾク、訓ツク、ヤカラ、シタヅガサ。　屬と書くは俗字。

尋と尋　尋（シン）たづぬ。尺度の名。八尺。　尋は誤字。

姉と姉　相通用す。

乘と乘　乘は音ジヨウ、訓ノル。　乘と書くは俗字。

切と切　切（セツ サイ）きる。しきり。　切は誤字。

竊と竊　竊（セツ）ぬすむ。ひそかに。　竊、窃は共に俗字。

歲と歲　歲（セイ サイ）とし。　歲は誤字。

潛と潛　潛は音セン、訓クグル、ヒソム。　潛と書くは俗字。

叟と叟　叟（ソウ）こしより。おきな。　叟は誤字。

族と族　族（ソク）いへがら、うぢ。　族は誤字。

總と総　兩字相通用す。

駄と駄　駄（タ）おはす。のす。　駄は誤字。

内と内　内（ダイ）うち。いる。　内は誤字。吶、納、訥、等も類推すべし。

帶と帶　帶（タイ）おび。おぶ。めぐる。　帶は誤字。

體と躰と体　躰は體の俗字。　体は音ホン、笨に同じ。アラシ（麤）と訓む。されば体を體の略字と心得て通用するは誤りなり。

臺と臺と台　臺は音タイ、又ハダイ、訓ウテナ。　臺と書くは俗字。　台ハ音タイなれども、其意義は、「星の名、三公の稱、ハラゴモリ」などにて、臺の意義とは全く異なり。之を同一に用ゐるは誤りなり。

當と當　當（タウ）あたる。　當は誤字。

嶋と島　三字通用す。

盜と盜　盜（タウ）ぬすむ。ぬすびと。　盜は誤字。

歎と嘆　歎は音タン、訓ナゲク、タメイキツク、ホムなど。　嘆と書くも同じ。

達と達　達（タツ）（ダチ）こほる。すぐれたる人。　達は誤字。

丈と丈　丈（ヂヤウ）尺度の名。尺の十倍。　丈は誤字。仗、杖等も類推すべし。

徵と徵　徵（チヨウ）めす。しるし。五音の一。　徵は誤字。

敕と勅　敕は音チヨク、訓ミコトノリ。　勅は敕と相通用す。

恥と耻　恥は音チ、訓ハヂ。　耻と書くは俗字。

鎮と鎮　鎮は鎮の俗字。

筑と筑　筑（チク）（トク）一種の樂器。　筑は誤字。

著と着　著は、アラハル、アキラカ、イチジルシなど訓む時は、音チヨ、ツク、又はキル、キモノなど、訓む時は、音チヤク。　着は著の俗字。

蟲と虫　蟲は音チウ、訓ムシにて、足ある動物の總稱。　虫は音キにて虺と書くに同じ。マムシ又は鱗介の總稱とす。世人之を同一に用ゐ

るは誤りなり。

腸と腸　腸（チャウ）はらわた。　腸は俗字。

場と塲　塲は場の俗字。

鐵と鋏と鉄　鐵は音デツ、訓クロガネ、ハモノなど。　鋏ハ音デイ、鐵の名なり。又鐵の古文なり　鉄は古文の鉄の字なり。鉄は音チツ、訓ヌフ、イルなど。故に鉄を鐵の俗字とするは誤りなり。

輒と輙　輒（ナフ）すなはち。　輙は俗字。

塵と塵　塵（テン）すまひ。みせ。　塵は誤字。纏、廛等も類推すべし。

典と典　典（テン）つかさどる。のり。　典は誤字。腆、興等も類推すべし。

寧と寧　寧（デイ、ネイ）やすし。むしろ。　寧は誤字。

呈と呈　呈は音デイ、訓シメス、アラハス。　呈ハ古文の呈又ハ狂の字にて、呈とはその意異なり。

兎と兎　兎はうさぎ。　兎は俗字。

鬪と鬪　鬪は音トウ、ツ、訓アラソフ、タタカフ。　鬪と書くは俗字。

寶と寶と宝　寶は音ハウ、訓タマ、タカラなど。　寶と書くは俗字。　宝も俗字。

拔と拔　拔（ハツ）ぬく。　拔は誤字。

冒と冒　冒（バウ、マウ）をかす。むさぼる。　冒は俗字。帽、瑁等も類推すべし。

博と博　博（ハク）ひろし。はくち。　博は誤字。

旆と旆　旆（ハイ）はた。　旆は誤字。

麥と麦　麦と書くは俗字。

罰と罰　罰（ヘツ、バチ）つみ。とがむ。　罰は誤字。

阪と坂　兩字共に音ハン、訓サカ。　阪は地勢傾きて險しき處をいひ、　坂は山の斜面なる處をいふ。故に阪は坂よりも急峻なる處をいふ。

犯と犯　犯（ハン、ボウ）をかす。たがふ。　犯は誤字。

凡と凡　凡は音ハン、訓オヨソ。凡と書くは誤字。帆、汎等も類推すべし。

報と報　報（ハウ）むくゆ。知らす。報は誤字。服も反なれども、赧は反なり。

冰と氷　冰は音ヒヨウ、訓コホリ。氷は冰の俗字。

賓と賔　賓（ヒン）客のこと。みちびく。賔は俗字。

分と分　分（フン）わかつ。なかば。分は誤字。扮、忿、粉、紛、貧等も類推すべし。

奮と奮　奮（フン）ふるふ。うごく。奮は誤字。

竝と並　兩字共に音ヘイ、訓オラブにて意義相同じ。

滅と滅　滅（ベツ）ほろぶ。しづむ。滅は誤字。

遍と徧　遍は音ヘン、訓アマネシ。徧は遍と音義共に同じ。

覓と覔　覓音ベキ、訓モトム。覔は覓の俗字。

溟と溟　溟（ベイ）くらし。海の稱。溟は誤字。

邊と邊　邊（ヘン）ほとり。かたはら。邊は誤字。

沒と没　沒（ボツ）しづむ。ほろぶ。没は誤字。

鳳と鳳　鳳（ホウ）神鳥の雄。鳳は誤字。

豐と豐　豐音ホウにて、ユタカと訓む。豐を豐と同樣に用ゐるは誤りなり。
豐は古文の禮の字にて。豐の意なし。

逢と逢　逢（ホウ）あふ。むかふ。逢は誤字。

步と步　步（ホウ）あゆむ。土地丈量の尺度の名。步は誤字。

慕と慕　慕（ボ）したふ。慕は誤字。

滿と滿、滿　滿（バン）みつ。みたす。滿、滿は共に誤字。

麻と麻　麻（バマ）あさ。麻は誤字。

脈と脉　脈（バクミヤク）すぢ。脉は俗字。

蒙と蒙　蒙（ボウモウ）くらし。かうむる。蒙は誤字。濛、朦等も類推すべし。

模と模　模音モ、訓カタ、ノリ。模は模の俗字。

賴と頼　賴は頼の俗字。　瀨を瀬と書くも此に同じ。

亂と乱　乱は亂の俗字。

隆と隆　隆（リウ）（リユ）さかんなり。たかし。　隆は誤字。

旅と旅　旅（リヨ）（ロ）たび。もろ〳〵。　旅は誤字。

稟と稟　稟（リン）（ヒン）ふちまい。うく。　稟は俗字。

裏と裡　裏音リ、訓ウラ。　裡は裏の俗字。

兩と兩、両　兩（リヤウ）ふたつ。衡（ハカリ）の目の名。　兩、両共に誤字。倆、掽等も類推すべし。

涼と凉　涼は音リヤウ、又はラウ、訓ウスシ、スズシ、悲シムなど。　凉と書くは俗字。

粱と粱　粱（リヤウ）（ラウ）おほあは。　粱は誤字。

類と類　類（ルキ）たぐひ。にる（似）。　類は誤字。

禮と礼　禮は音レイ、ライ、訓ヰヤ。　礼は正しくは礼と書くべし、礼は禮の古文。

獵と猟、猟　獵（レフ）（ロフ）かり。　獵は俗字。　猟は誤字。

曆と暦。歷と歷　曆（レキ）こよみ。　歷（レキ）ふる。　暦、歷は共に誤字。

往と往　往（ワウ）ゆく。いにしへ。　往は誤字。

正字俗字辨 終

和字畧

我國にて、便宜上漢字の缺を補はんがために作れるものを和字といふ。故に和字には、訓のみありて、音なし。されども中には、症(シヤウ)、鋲(ビヤウ、釘の一種)諦(ヂヤウ、命令)など漢字音を借りて、字音の如く讀ませたるも交れり。今左に、古來用ゐ來れる者の中より、尤も著しきものを擧ぐ。

適 アツパレ。賞讃すること。

鰯 イワシ。一種の海魚。

俤 オモカゲ。面容をいふ。

颪 オロシ。山上より吹きおろす風。

絨 ヨドシ。鎧の小札を、綴りたる絲、革の類をいふ。實は緒通しの意。

糀 カウヂ。酒など作る原料とするもの。

叺 カマス。米麥などを入るゝ藁袋。

鱚　キス。一種の海魚。

凩　コガラシ。秋の末より冬にかけて吹く風。

込　コム。

笹　ササ。小竹の稱。

榊　サカキ。一種の木。

琻　シカト。確かなるにいふ。

鳴　シギ。一種の鳥。

躾　シツケ。禮儀作法などを教へ習はしむること。

鯱　シヤチ。一種の海獸。

椙　スギ。杉と同樣に用ゐる。

辷　スベル。足のするゝと、とゞまらぬにいふ。

杣　ソマ。山林、材木、伐木業者等をいふ。

峠　タウゲ、山坂の登りつめたる處。

凧　タコ。紙鳶とも書く。小兒の玩具。

褞　タスキ。袖をくゝりあぐる紐。

狆　チン。小き一種の狗。

閊　ツカヘ。支障のあること。サシツカヘといふ。

辻　ツジ。四方に通ぜる道路。十字街のこと。

鯲　ドヂヤウ。一種の魚。泥鰌とも書く。

迚　トテ。到底といふに同じく、如何にすともの意あり。

鞆　トモ。古の弓射る時に用ゐし具。

凪　ナギ。風のやむこと。海上の靜穩なるにもいふ。

鯰　ナマヅ。一種の淡水魚。

鴆　ニホ。一種の水禽、形鴨に似たり。

畑　ハタケ。豆麥など植うる陸田をいふ。

畠　畑に同じ。

働　ハタラク。骨折ること。

噺　ハナシ。話に同じ。

鉧　ハバキ。刀劍の鍔元を固むる金具。

枡　マス。穀類など量る器。

籾　モミ。米の皮をとらざるもの、又は米の皮殼をもいふ。

麿　マロ。麻と呂との合字。自己の謙稱。

臚　ヤガテ。古くは、すぐに(直に)の意に用ゐたれど、今日は少時を經て後の意に用ゐる。

鑓　ヤリ。武器の稱。

和字略終

左に附錄として載せたる「國語假字遣歌」の一篇は、編者の曾て山口中學校に教鞭を執れりし時、生徒の記憶に便せむがために、別に一小冊子となして、授けし所のものなり。爾來十星霜、各所の中學校に於て、授け試みし實驗に由れば、一二年級の生徒にして、之を記憶すること眞に容易なり。因つてそのまゝ轉載することゝなしぬ。

國語假字遣歌

はしがき

今より、八とせばかりの昔なりけむ、我兄世にありしころ、彼の國語假字遣といふものが、一種の字典同樣に見なされたるを憂へ、所謂、新體詩やうの歌にものして、記憶のたよりとせしを、おのれも、これに倣ひて學びしに、自在に諳誦することを得て、忘るゝことなかりき。其後、大森惟中氏の、新式音訓假字遣教科書を著すに及び、一時世に行はるゝやうなりしが、その組織は、短歌のさまに倣ひたれども、更に思想上の關係なく、無味乾燥にして、眞に單純なる器械的諳誦に過ぎざりければ、覺ゆるにおそく、忘るゝに早かり。故にこれも幾何ならずして、すたれにき。爾來國運の進歩と共に、國語國字の議論、世に喧しくなりきて、遂に文部省は、字音假字遣を刷新して、初等教育に實施するに至りぬ。かゝる趨勢に方りては、國語假字遣の如きも、いつかは改良の機運にも逢すべけれど、未だ歴史的假字遣の存せらるゝ間は、之を幼

童に授けむに、智力的記憶に據らしむる方法など、もとより必要ならめど、これも頗複雜にして、統一上の困難少からざるのみならず、語原の定かならぬもいとおほかり。かゝればなほ、記憶し易き手段によりて諳誦する方、卻りて容易なるがうへに、彼の紛雜を免るゝこと、余が經驗上たしかに斷言する所なり。乃ちみづから拙陋を忘れて、嘗て記憶に供せし新體詩めきたるものを、訂正增補し、初學の參考に資せむとす。勿論、唯記憶に供せむことを主とする者なれば、勢雅馴なること能はず。なるべく簡單にして、系統を離れざるやうにともものしつれど、なほ前後の脈絡を失ひ、意味とゝのはで、動もすれば俳諧に屬する所もあり。また補助語は、つとめて用ゐぬやう心しつれど、なほ往々全句を塡めし所などあり、これまた止むことを得ざればなり。さばれ、通誦數回にして、殆記憶しつべく、既に記憶せしうへは、上欄に註せし語の原義と、相對照して、益々記憶の力を精確ならしめむことを期す。

明治三十四年六月上旬

編者識す

國語假字遣歌

第一、い、ゐ、ひ

此の假字、一音の語、又は語の上にある時は、いとゐと紛れ、語の中及び下にある時は、い、ゐ、ひ共に紛るゝなり。左に和行ゐと書くべき語の限りと、也行いの、語の中、下につきて、ゐ、ひに紛るる語の限りとを擧ぐ。若し此の外の語にて、一音の語、又は語の上にある時は、也行いの假字にて、語の中或は語の下にある時は、悉く波行ひの假字ぞと心得べし。

和行ゐの假字づかひ歌

キナカ（田居中）　ウナヰ（項居）　ヒキヰ（引居）　クヒヰ（食破間）　キモリ（居守）　キザリ（居去リ）　カタヰ（片居）

田舍　醫師　率
ゐなか。うなゐが。ひきゐたる。

堰　球　烏　芋
ゐせきの。くわゐねをたえて。

膝　行　乞　兒
ゐざる。かたゐに。にたれども。

豕（亥の子）　猪（猪の肉）
ゐのこは。ゐのしゝ。かみにけり。

井　手　菌　莟　居　蛸
ゐでの。ゐかげに。ゐる。ゐもり。

紅（吳藍）
はらの。くれなゐ。うるはしさ。

位　雲居
クラヰ(座居)　くらゐ。くもゐに。たかくして。

宿直(殿居)　恭(禮、敬)
とのゐ。すがたも。ゐやゝし。

紫陽花　家居　鴨居
アヂサヰ(厚子藍)　にはに。あぢさゐ。さきみちて。　いへゐ。かもゐも。たかけれど。

神門(鳥居)　地震　參
ナヰ(鳴り居)　たかき。とりゐの。なゐまゐる。

基　圍居
マヰル(參居)　あやふき。もとゐぞ。まとゐすな。

井
モトヰ(本居)　ゐに。のぞむより。おそろしや。

右の外に、胃、外耶圍爐裏などは字音なり。猪のゐの假字たることを知らば、猪口も猪頸も、皆ゐの假字なることを推知すべし。井のゐなることを知らば、井桁と、井筒も、皆ゐなることを推知すべし。その他居はゐなれば、敷居も、端居もゐにて、臀(ヰサラヒ)は膝行(ヰザリ、居去りの義)の延語なれば、同じくゐなることを知るべし。紅(吳の藍の約語)のゐたる事を知らば、藍も唐藍も、二藍も皆ゐなること勿論なり。織複(ヰノアシ)手膝(ヰノコヅチ)天名精(ヰノシリグサ)赭魁(ヰノトトキ)騷騷(サヰザヰ)潮騷(シホザヰ)行器(ホカヰ)などもゐの假字なれども、其語或は餘りに古く、或は餘りに必要のなき語なれば省きつ。

也行いの假字づかひ歌

阿行いの假字も之に同じ。

報(酬)　柊　櫂　悔　老
こぎ。かへすべき。かいもなし。　くいて。かへらぬ。わが。たいの。

サイヅチ(小槌ノ延)
むくいは。こゝに。さいづちを。　かしらに。うけて。うせなまし。

右の外に、寐(イ)の如き一音にて、ゐと紛れ易き語のある時は、ゐ、いの二つの歌中になきをもて、いと知るべきよし既にことわりおけるが如し。故に朝寐(アサイ)も、熟寐(ウマイ)も、寐穢(イギタナシ)も、皆いなることを推知すべし。綾(オイカケ)肉刺(ノイズミ)梅華皮(カイラギ)の如きは、必要少ければ省きつ。

この他に、音便にて、き及びしをいとよぶものあれど、(埼玉(サキタマ)をサイタマ、行きてを行いて、高しを高い、書きてを、書いてなどいふが如し)それは音便假字遺法を別に學びて知るべし。

第二、え、ゑ、へ

此の假字、一音の語、又は語の上にある時は、えとゑと紛れ、語の中、下にある時は、え、ゑ、

へ共に紛るゝなり。左に也行えと、和行ゑとの語を擧げて歌とす。若し是の外の語にして、語の上にある時は。也行えの假名にて、語の中或は語の下にある時は、悉く波行への假字ぞと心得べし。

也行えの假字づかひ歌

（阿行えの假名も之に同じ。）

入江　蜂螺　鮠
サヾエ（細少柄）　いりえの。さゞえ。小川のはえ。

下枝　鶯
しづえに。ひえどり。あそぶなり。

稗
ハエ（速）　ひえくふとりは。おほけれど。

鵠
ぬえは。なにをか。くふならむ。

吹笛
フエ（吹ク柄）　その。のどぶえを。いとほしゝ。

その。ものゝふの。きたりける。

葉（生）
ヒコバエ（孫生）　ころものいろは。ひこばえの。

緑（萌黄）
もえぎなりけむ。そのときの。

甲
ナガエ（長柄）　としは。きのえか。いざしらず。

轅
くるまのながえ。ながくに。

ひさしくなりぬ。いまよりは。

右の外、柔弱（アエカ）距（アコエ）竹筒（ササエ）棬（サスエ）等あれども、語餘りに古くして、必要少ければ省きつ。

この他、阿行下二段の動詞、及び也行下二段の動詞の、第一變化（未然段）第二變化（連用段）は、えの假字なり。阿行の動詞は、え（得）の一語のみなれども、也行の動詞は甚だ多し。即ち、いえ（癒）おほえ（覺）きこえ（聞）こえ（越）こえ（肥）こごえ（凍）さえ（冴）さかえ（榮）そびえ（聳）たえ（絶）つひえ（潰）ひえ（冷）はえ（生）ほえ（吼）もえ（燃）等なほいと多かり。そは別に動詞の活用を學びて知るべし。

和行ゑの假字づかひ歌

畫工　彩色　錦繪
エドル（繪取ル）　ゑかきが。ゑどる。にしきゑの。

笑　屠兒
ゑみても。にくし。ゑとりがほ。

刎　餌袋
なほこそ。ゑぐれ。ゑぶくろの。

飢
うゑを。わすれて。いまさらに。

醬　可笑
ゑくぼ。ゑましき。かほばせに。

磯多
ゑたと。よばれて。くやみつゝ。

ふくれ。がちなる。このころは。

醉　酸　末
ゑうては。ゑぐし。したのすゑ。

ツクヱ（杯据ヱ）　まはらぬ。こゑを。ほにあげて。　聲　しぼる。ゑぼしは。ふづくゑに。　烏帽子　文机

スヱモノ（据ヱ物）　陶物（据）　すゑもの。つくる。ゑんじゆかげ。　槐樹　こずゑ。うちきり。つゑにつき。　梢　杖

コヅヱ（木ノ末）　おほぢ。ねりゆく。わがまなご。　故付　はや。ゆゑづきぬ。きのふまで。

蜻蛉　ゑんば。おひつる。をさなごが。　植　うゑし。この身を。あとにして。

右の外、垣下（ヱンガ）怨ず（ヱンズ）智慧（チヱ）などは字音なり。餌、繪、穢の ゑ の假字なるを知らば、餌食（ヱジキ）も、餌刺（ヱサシ）も、繪馬（ヱマ）も、巴（トモヱ、鞆繪の義）も、穢土（ヱド）も ゑ なることを推知すべし。据が ゑ の假字なれば、礎（イシズヱ、石据の義）も ゑ の理なり。呻吟（ヱナク）狗（ヱヌ）嘲（ヱル）紈綵（ヱリ）假髮（スヱ）などは、古語にて、今に必要少ければ省きつ。

第三、お、を、ほ

此の假名は、一音の語、又は語の上にある時は、おとをと紛れ、中と下とにある時は、ほとを と紛るゝなり。我國語には、お を中、下に用ゐたる例なければ、これには紛れず。左に和行を の語を擧ぐ。若し、是の外の語にして、語の上にある時は、阿行お の假字にして、語の中、下にある時は、悉く、波行ほ の假字ぞと心得べし。

和行をの假字づかひ歌

ミサヲ（身竿）　小簾　をすを。あげたる。美女（手弱女）　たをやめの。　操　みさをは。いまも。紅梅　こをばいと。

チトメ（小女）　薫　かをる。女　をんなの。敎草　をしへぐさ。　少女　をとめ。女　をみなも。女兒　をんなごも。

チミナ（小身人）

シナリ（枝折）　莱（枝折）　しをりつゝゆく。みちもせに。　萎　しをれがちなる。女郎花　をみなへし。

シヲル（撓折ル）　折　をれば。こぼるゝ。しらつゆを。　芭蕉　のするばせをは。青　いろあをし。

チケ（苧ヲ入ル、器）　紫苑尾花　しをに。をばなを。とりまぜて。　桶　さしたるをけに。みづたゝへ。

チトゞシ（遠ノ年）　食物　をしもの。いそぐ。あさなゆふな。　一昨年　をとゞしのとし。　一昨日　をとつひの日。

チシドリ（惜ム情アル鳥）　繊蕊　をしのちぎりを。むすびそめ。　治（納、收）　いへをさまれと。ねがふなる。

チサ（麻差シ）　こゝろのひまは。とるをさの。　筬　餘り（多くは）　をさ〳〵あらじ。なにごとも。

チ、シ（男子ラシ）　唯々　申　をゝとまをして。つかへつゝ。　緒萼（緒）　うみをのいとの。うみもせじ。

チヒ（男生ヒ）　雄々　男　をゝしき。をとこの。かたいへば。　男　男　兒　蛸叔父（翁）（叔母）　をのこ。をのこゞ。をひに。をぢ。

チヂ（小父）　斧　羊腸（九折）　をのを。になひて。つゞらをり。　徐々　岡　岩　上　やをら。こえくる。をか。をのへ。

遠（彼方）近（此方）　をち。こち。みわたす。をちかたに。　叫　長　をめくは。むしの。をさといふ。

チロチ（尾蠻）　大　蛇　をろちのこゑか。をしやこの。　惜　いのちとられて。せんなしと。

戦　慄　をのゝぎつゝも。ふしをがむ。　拜（折屈）　かみにたすけを。よぶこどり。

チコタル（愚垂ル）　可　笑　をかしや。つねは。をこたりて。　怠　いまはのをりに。をこのもの。

檻（居リ）　檻　をりに。いりぬる。身ならねば。　終（畢、竟、了）　こゝに。いのちを。をはらずも。

チサナゴ（長無兒）　にぐるにしかじ。をさなしや。　幼　稚　十　とをにもたらぬ。をさなごの。

カツチ（堅魚）　竿　さをを。さゝげて。いををつる。　魚　白　魚　文鰧魚（飛魚）瀨（虚言を吐く）　そのいを。なにぞ。かつを。ひを。　魚　鰹　泳魚

イサチ（勇雄）　しろを。とびをと。をそのかは。　章（採皮）　をしかは。きなす。いさををば。　勦　功

烏滸（愚かにも）　をこがましくな。をごりそよ。　驕（奢、侈）　きんぜいをかしは。せざりしか。　犯（侵、干、冒）

右の外、招魂木（ヲカタマノキ）荻、尺蠖（ヲギムシ）招（ヲグ）童男（ヲグナ）朮（ヲケラ）虎魚（ヲコジ）動（ヲゴク）蠢動（ヲゴメク）誘引（ヲコヅル、招釣の義）譯語（ヲサ）兎（ヲサギ）懦弱（ヲヂナシ）條々（ヲヂヲヂ）現在（ヲツツ）織（ヲドシ、緒通しの義）踊、躍、跳（ヲドル）水脈（ミヲ、水尾の義）俳優（ワザヲギ）などあれども、餘りに古語なるか、又は語原の上より推知すべきもの、其他歌の連絡上、止むを得で漏しつるもの、一つ二つはあるべし。

第四、わ、は、

左に、和行わと書くべき語のかぎりを擧ぐ、わとはと紛るゝは、語の中、或は語の下にある時に限りて、語の上にある時は、紛るゝことなし。故に、こゝに擧げたる語の外にして、わに紛るゝ語ある時は、すべて、はの假字なりと心得べし。

但し、語の上にありても、僅(わづか)、はつか、走(わしる、はしる)の二字、は、わ兩樣に書けども、わは新しく、は は古語と知るべし。

和行わの假字づかひ歌

アヲ(アハ助辭、輪ノ義)　野分　のわきのかぜも。身にしまず。　沐雪　ふるあわゆきも。さぶからず。

サワヤカ(騷ヤカ)　聲遣　こわづかひさへ。　爽　さわやかに。　聲高々　こわたかだかに。　罵騷　のりさわぐ。

サワグ(サハ助辭、湧ク貌)

イワケナシ(イハ助辭、分ケ無シノ義)　稚　いわけなかりし。ときすぎぬ。　俵　おもきたわらも。かろらかに。

タワラ(田藁)　作業(所爲)　しわざ。ちはやき。時すぎぬ。　美女(手弱女)　たわやめなせる。おもかげも。

シワ(萎レ曲)　皺　しわみ〳〵て。　烏芋　くわゐなし。　轡　ますぐき腰も。くつわなす。

クワキ(食ヒ分レ間)　浦曲　うらわのあまが。　鰯　とるいわし。

クツワ(口ノ輪)

イワシ(魚弱シ)　撓　まがり。たわみて。　弱　かよわしや。　水泡　みなわ。ふきだし。　撓々　たわ〳〵に。

乾(渴)　みづ。かわければ。　弱　よわりゆき。

腸　そのはらわたの。くされては。　硫黄　ゆわうのいろか。かぎつけて。

鶏　ひわが。ついばむ。さまみては。　周章　あわつる。あまも。　理　ことわりや。

此の外、諺(コトワザ、言事の意)・坐(スワル、据(スエ)ガヱなれば、音通上ワに轉ず)酒・瓮(ミワ、甕和(ミカワ)の略)・散亂(ワワク)・濫褻(ワワケ)・廓(クルワ)・埴輪(ハニワ)などあれど、省きつ。

第五、じ、ぢ、

此の假字は、語の上、中、下共に紛(マギ)るゝなり。左に佐行じの語を列擧(レッキョ)す。若し此の外(ホカ)の語に

して、紛(マギ)らはしき語ある時は、語の上、中、下に關(カカ)はらず、總て、多行ぢの假字と心得べし。

佐行じの假字づかひ歌

我國語には、語の上にぢの假字を用ゐることなし。

マジロク（目退ク）　旋風（廻毛）　つむじのかぜにも。まじろかず。

マナジリ（目ノ尻）　眦　まなじり。みはり。のりなじる。

ナジル（名知ル）　詰　そのいきほひに。たじろく敵。

タジロク（タハ助辭、退ク）　挫　くじけたゆまぬ。つらだましひ。

ヤジリ（矢ノ尻）　鏃　やじり。なげすて。ふみにじる。

ウナジ（頸尻）　項　うなじのちしほ。すさまじや。

スサマジ（荒增シ）　荒涼　くじるまなこを。つまはじき。

ムラジ（村主）　蛆　うじとおなじき。やつこらが。

同　名をなまじひに。むさぼりて。

縮　くびをしじめて。ふりかざし。

甚（微妙）　いむかふこゝろの。いみじさよ。

かれがむかしは。むらじにて。

連　名はふじよりも。なほたかき。

富士

ヒジリ（日知リ）　聖　ひじりと。ひとに。よばれたる。

アルジ（有主）　主人　あるじのとじが。あるじぶり。

トジ（戸主）　刀自　あるじのうへに。さらしたる。

カタジケナシ（難シ氣無シ）　忝　かたじけなみて。うけいたゞく。

ホシゞ（乾シ肉）　脯　ほしじに。ひじき、うちまじへ。

シゞミ（縮ミ貝）　蜆　しじみに。はじかみ。きじ。ひつじ。

ハジカミ（齒蹙）　薑　しじかみ。ひつじ。

ニジ（丹白）　禁厭　まじなふ。くじの。さちありて。

イチジルシ（早ク知ル）　文字　あまのかはらの。あじろぎに。

ハジメ（端ノ活キタル語）　著　いはでも。もじに。いちじるし。

右の外、痣肉（アマジゝ）橇（カジキ）呪詛（カジル）髭（カモジ、髭文字の義）瑞（コジリ、

鹿尾菜　雑（交）　ひじき、うちまじへ。

雑子　羊（未）　しじみに。はじかみ。きじ。ひつじ。

鹿章　狢　くじか。むじなの。かはごろも。

辻風　つじかぜ。さむし。つじぎみが。

辻君

虹　あらはれいでし。そらのにじ。

網代木　あまのかはらの。あじろぎに。

跳躍　ながれかゝりし。いはつゝじ。

始（初）　いまに。はじめて。ものいはじ。

不　いはでも。もじに。いちじるし。

小後の裳)假庇(サジキ、サヅキの轉)菅尖(ソジシ)禮物(ヰヤジロ)などあれど省きたり。

第六、ず、づ、

此の假字も、語の上、中、下、共に紛るゝなり。左に、佐行ずの語を擧ぐ。此の外の語にして。紛らはしきものは、語の上中下をとはず、悉く、他行づの假字なりと知るべし。

佐行ずの假字づかひ歌

ハズ(端末)　鳴　弭(筈)　鈴(錫)
タ、ズム(立住)　なりはずのおと。すずのおと。

涼　佇立
すずしきかげに。たゝずみて。

スヾメ(清シキ目ノ鳥)　鈴虫
すずむしのね。うちきけば。

葛葉　賜
くずばのしたを。くゞるもず。

ネズミ(穴住ノ轉、又ハ寢盗ノ約)　雀　野鼠
すずめ。はらひて。のねずみと。

蚯蚓　數々
あらそふみゝず。かず〳〵の。

ミ、ズ(目見ズ)　疵
カズ(數フノ轉)　きずつけられて。うせにけり。

のべのあなたの。市にうる。

スヾキ(皮ノ清シキ魚)　鱸　從者
すずきを。ずさに。かはせしに。

不
いをは。かはずて。草の名の。

すゝきたをりて。かへりけり。

スヾリ(墨磨リ)　硯
すずりいだせど。ものかゝず。

不
いかにと。とへど。いらへせず。

右の外、髻華(ウズ)國栖(クズ)必(カナラズ)生絹(スズシ)菘(スズナ)大根(スズシロ)漫(スズロ)篠(スズ)數珠(ズズ)準(ナズラフ)機勢(ハズミ)などあれど、故ありて漏しつ。

國語假字遣歌 終

字音假字遣大要

字音假字遣の紛れ易く、區別しがたきは、國語假字遣よりも更に甚し。今そを記憶せむには、二樣の方法に依るを便とす。其一は、字の形狀によりて、その假字を類推する法と、其二は、國語假字遣の記憶法と同じく、その數の少き方を記憶しおきて、多き方を推知する方法なり。

第一、あう、あふ、おう、をう、わう、

【あう】左に記せる文字の外は、大抵この「あう」の假字と心得べし。

【あふ】押。狎。鴨。凹。

【おう】應。謳。漚。嘔。鷗。甌。歐。毆。

【をう】翁。蓊。

【わう】王。往。汪。枉。旺。庖。黄。横。皇。凰。

第二、い、ゐ、

【い】左記の文字の外は、大抵この「い」の假字と心得べし。

委。倭。萎。偉。緯。違。韋。葦。圍。帷。唯。惟。維。尉。慰。胃。蝟。位。爲。威。畏。遺。彙。

【ゐ】域。閾。

【ゐき】

【ゐん】員。韻。隕。殞。允。院。尹。

この外、阿列なるア、カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワ、及び江列なるエ、ケ、セ、テ、ネ、ヘ、メ、エ、レ、エ、の下にありて、愛、介、妻、戴、影、敬、世、鄭の如きは、皆「い」の假字にて、ス、ツ、ユ、ルの下にありて、水、追、唯、類の如きは、皆「ゐ」の假字と知るべし。

第三、いう、いふ、いゆう、ゆう、

【いう】左の文字の外は、大抵この「いう」の假字なり。但し、「いゆう」「ゆう」は、「いう」と書くも妨げなし。

【いふ】邑。挹。悒。揖。

第四、え、ゑ、

【え】左の文字の外は、大抵この「え」の假字と心得べし。

【ゑ】會。繪。回。廻。惠。慧。穢。衞。

【ゑん】袁。遠。猿。轅。爰。援。媛。宛。蜿。婉。豌。怨。苑。鴛。圓。淵。垣。寃。

【ゑつ】越。鉞。曰。

第五、お、を、

【お】左の文字の外は、大抵この「お」の假字と心得べし。

鳥。嗚。惡。汚。汗。

【を】

【をく】屋。

【をん】溫。慍。褞。怨。苑。園。穩。遠。

第六、か、くわ、

【か】左の文字の外は、大抵この「か」の假字と心得べし。

【くわ】化。花。訛。貨。華。嘩。果。菓。課。夥。禾。科。渦。禍。蝸。過。戈。火。瓜。寡。

【くわい】懷。壞。回。廻。徊。會。繪。獪。膾。灰。恢。詼。傀。塊。槐。魁。乖。快。怪。潰。穢。

悔。晦。誨。

【くわく】畫。劃。郭。廓。確。鶴。矍。攫。獲。擴。赫。

【くわつ】滑。猾。活。括。刮。濶。豁。

【くわん】完。浣。貫。慣。換。煥。官。菅。管。棺。館。環。擐。還。勸。觀。歡。灌。鑵。卷。冠。寬。盥。鰥。關。緩。

第七、が、ぐわ、

左の文字の外は、大抵この「が」の假字と心得べし。

【が】瓦。臥。畫。

【ぐわ】外。

【ぐわい】月。

【ぐわつ】願。丸。元。玩。翫。頑。

第八、かう、かふ、こう、こふ、くわう、

【かう】左の文字の外は、大抵この「かう」の假字と心得べし。

【かふ】甲。匣。狎。岬。合。恰。洽。閤。峽。闔。

【こう】工。功。攻。虹。紅。肛。訌。貢。項。槓。侯。候。喉。猴。溝。構。媾。購。講。篝。孔。吼。口。叩。扣。后。逅。垢。苟。鉤。拘。江。鴻。公。厚。弘。肱。肯。亘。恒。洪。興。薨。後。巷。港。寇。

【こふ】刼。怯。業。

【くわう】黄。廣。壙。礦。曠。皇。徨。惶。遑。篁。蝗。光。恍。胱。晃。幌。荒。宏。轟。

第九、がう、がふ、ごう、ごふ、ぐわう、

【がう】左の文字の外は、大抵この「がう」の假字と心得べし。

【がふ】合。

【ごふ】業。刼。

【ぐわう】轟。

第十、きう、きふ、きゆう、

【きう】左の文字の外は、大抵この「きう」の假字と心得べし。
【きふ】及。汲。級。笈。吸。泣。急。給。
【きゆう】宮。弓。躬。窮。
但し、「きゆう」は、「きう」と書くも妨なし。

第十一、きやう、きよう、けう、けふ、

【きやう】左の文字の外は、大抵この「きやう」の假字と心得べし。
【きよう】共。供。拱。恭。蛬。恐。鞏。凶。兇。胸。恟。興。矜。兢。競。
【けう】喬。橋。嬌。驕。矯。徼。竅。叫。梟。敎。
【けふ】夾。峽。俠。挾。狹。頰。鋏。篋。愜。怯。刼。恊。脅。脇。

第十二、ぎやう、ぎよう、げう、げふ、

【ぎやう】左の文字の外は、大抵この「ぎやう」の假字と心得べし。

【ぎよう】凝。
【げう】堯。僥。澆。曉。驍。磽。翹。樂。
【げふ】業。

第十三、さう、さふ、そう、

【さう】左の文字の外は、大抵この「さう」の假字と心得べし。
【さふ】挿。匝。
【そう】宗。崇。踪。宋。綜。曾。僧。層。叟。搜。艘。奏。湊。輳。窗。總。聰。走。逆。忽。藪。叢。嗽。

第十四、ざう、ざふ、ぞう、

【ざう】左の文字の外は、大抵この「ざう」の假字と心得べし。
【ざふ】雜。
【ぞう】增。憎。贈。

第十五、しう(しゆう)、しふ(じふ)　ぢゆう、

【しう】左の文字の外は、大抵この「しう」の假字と心得べし。

【しふ】(じふ)　習。摺。楫。葺。緝。執。集。襲。十。什。汁。拾。澁。

但し、「しゆう」は「しう」と書くも妨げなし。

【ぢゆう】重。住。

第十六、じ、ぢ、

左の文字の外は、この「じ」の假字と心得べし。

【じ】地。治。持。痔。峙。除。尼。柱。

【ぢき】直。

【ぢく】竺。舳。軸。

【ぢつ】昵。

【ぢよ】女。除。

【ぢん】陣。塵。

第十七、しやう、しよう、せう、せふ、

【しやう】左の文字の外は。大抵この「しやう」の假字と心得べし。

【しよう】鐘。鍾。衝。踵。松。訟。頌。鬆。升。昇。陞。承。勝。證。誦。稱。從。聳。慫。蹤。悚。春。

【せう】召。沼。招。昭。照。詔。韶。小。少。抄。肖。宵。消。梢。逍。哨。硝。悄。焦。蕉。樵。礁。蕭。簫。嘯。笑。燒。椒。

【せふ】妾。接。捷。睫。渉。攝。霎。葉。慴。

第十八、じやう、じよう、ぜう、ぢやう、でう、でふ、

【じやう】左の文字の外は、大抵この「じやう」の假字と心得べし。

【じよう】冗。繩。丞。蒸。乘。剩。

【ぜう】擾。饒。繞。遶。

【ぢやう】場。孃。釀。丈。仗。杖。定。錠。
【でう】尿。溺。條。條。
【てふ】疊。

第十九、ず、づ、

左の文字の外は、大抵この「ず」の假字と心得べし。
豆。徒。途。頭。圖。

第二十、たう、たふ、とう、

左の文字の外ハ、大抵この「たう」の假字と心得べし。
【たう】答。塔。沓。踏。
【たふ】等。透。統。投。冬。疼。豆。逗。痘。登。偷。桶。藤。籐。謄。騰。頭。燈。鬪。東。凍。
【とう】棟。

第二十一、だう、どう、

【だう】左の文字の外は、大抵この「だう」の假字と心得べし。
【どう】同。桐。筒。胴。銅。童。瞳。動。慟。

第二十二、ちう、ちゆう、ちふ、

【ちう】左の文字の外は、大抵この「ちう」の假字と心得べし。
【ちゆう】中。仲。忠。蟲。注。柱。註。駐。誅。厨。鑄。鍮。衷。
【ちふ】墊。
但し、「ちゆう」は「ちう」とかくも妨げなし。

第二十三、ちやう、ちよう、てう、てふ、

【ちやう】左の文字の外は、大抵この「ちやう」の假字と心得べし。
【ちよう】徵。懲。籠。塚。重。澄。
【てう】凋。彫。調。朝。潮。嘲。兆。挑。眺。窕。跳。銚。超。趙。鳥。弔。釣。
【てふ】貼。帖。喋。蝶。牒。諜。

第二十四、なう、なふ、のう、

【なう】左の文字の外は、大抵この「なう」の假字と心得べし。
【なふ】納。
【のう】農。濃。膿。能。

第二十五、にう、にふ、

【にう】左の文字の外は、大抵この「にう」の假字と心得べし。
【にふ】入。

第二十六、にやう、によう、ねう、

【にやう】左の文字の外は、大抵この「にやう」の假名と心得べし。
【によう】女。
【ねう】尿。溺。饒。繞。

第二十七、はう、はふ、ほう、ほふ、

【はう】左の文字の外は、この「はう」の假字と心得べし。
【はふ】法。乏。
【ほう】封。幇。奉。俸。捧。峰。逢。烽。蜂。鋒。蓬。縫。朋。崩。鵬。豐。鳳。剖。邦。
【ほふ】法。

第二十八、ばう、ばふ、ぼう、ぼふ、

【ばう】左の文字の外は、大抵この「ばう」の假字と心得べし。
【ばふ】乏。
【ぼう】貿。棒。眸。某。謀。
【ぼふ】乏。

第二十九、ひやう、ひよう、へう、

【ひやう】左の文字の外は、大抵この「ひやう」の假字と心得べし。

【ひよう】冰。馮。憑。

【へう】表。俵。票。剽。漂。標。瓢。飄。豹。飇。

第三十、びやう、べう、

【びやう】左の文字の外は大抵この「びやう」の假字と心得べし。

【べう】苗。描。猫。秒。眇。渺。廟。

第三十一、まう、もう、

【まう】左の文字の外は、大抵この「まう」の假字と心得べし。

【もう】蒙。濛。朦。艨。毛。耄。

第三十二、みやう、めう、

【みやう】左の文字の外は、大抵この「みやう」の假字と心得べし。

【めう】妙。苗。猫。

第三十三、やう、えう、えふ、よう、

【やう】左の文字の外は、大抵この「やう」の假字と心得べし。

【えう】夭。妖。徭。搖。遙。謠。要。腰。曜。耀。幼。窈。拗。杳。

【えふ】葉。

【よう】用。佣。踊。湧。庸。傭。膚。容。蓉。溶。鎔。擁。癰。膺。鷹。孕。

第三十四、らう、らふ、ろう、

【らう】左の文字の外は、大抵この「らう」の假字と心得べし。

【らふ】臘。蠟。拉。

【ろう】籠。瀧。朧。瓏。豐。隴。瀧。弄。漏。陋。樓。鏤。髏。僂。

第三十五、りう、りふ、りゆう、

【りう】左の文字の外は、大抵この「りう」の假字と心得べし。

【りふ】立。笠。粒。
【りゆう】隆。龍。
但し、「りゆう」は、「りう」と書くも妨げなし。

第三十六、りやう、りよう、れう、れふ、

【りやう】左の文字の外は、大抵この「りやう」の假字と心得べし。
【りよう】凌。陵。稜。綾。菱。楞。龍。
【れう】僚。寮。療。遼。燎。潦。了。料。聊。寥。
【れふ】獵。鬣。

字音假字遣大要 終

明治四十三年六月廿一日印刷
明治四十三年六月廿五日發行

正價金六拾錢

著作者　東京市神田區鍛冶町四番地　新井無二郎
發行者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　伊藤岩治郎
印刷者　東京市京橋區築地二丁目十七番地　野村宗十郎
印刷所　株式會社東京築地活版製造所
發行所　東京市神田區今川橋通鍛冶町　誠之堂書店
電話本局九百四十九番
振替貯金口座東京四七七二番

不許複製

次の書目を通覽あらんことを

誠之堂書店出版目錄

東京市神田區鍛冶町今川橋通大街
電話本局九四九・振替口座四七七二

書名	定價	郵稅
府立第四中學校長 深井鑑一郎 ○大學中庸講義	圓十錢 二五	四錢
花輪時之輔 深井鑑一郎 ○論語講義 二册	七〇	八
無名氏 ○適解正義 錦囊論語	三五	四
深井鑑一郎 ○孟子講義 二册	七五	八
深井鑑一郎 花輪時之輔 ○大學、中庸、論語、孟子、四書講義 全五册	一・七〇	一六
尾池義雄 ○孟子神髓	七〇	八
河村北溟 ○論文日本政記講義 二册	五五	八
深井鑑一郎 ○論文日本外史講義	二五	四
堀捨次郎名取弘三講述 深井鑑一郎編 ○正文章軌範講義 二册	七〇	八

書名	正價	郵稅
深井鑑一郎 ○孝經講義	圓十錢 一五	二錢
服部誠一 ○尚武評論孫吳講義	四〇	八
柳田幾作 ○卦象明辨周易講義 二册	七〇	八
龜谷省軒題辭 羽山尚德 ○文法詳解小學講義 內編外編	六〇	八
深井鑑一郎 山田準 ○教科適用標註大學中庸 合本	一五	二
深井鑑一郎 山田準 ○教科適用標註論語	三	四
深井鑑一郎 山田準 ○教科適用標註孟子	三五	四
山田準 ○教科適用標註小學 內編外編 各册	八	二

○適用教科 深井鑑一郎 山田準 標註四書 三五 六

○適用教科 深井鑑一郎 山田準 標註文章軌範 正續二冊 正續各三五 四

○中等教育 漢文學講義全書 合本帙入(講義)◎大學中庸◎日本外史 全十二冊(書目)論文◎日本政記論文◎正文章軌範◎孫子◎吳子◎論語◎孟子◎孝經 三・四〇 三〇

○新定 金井助作 中等作文軌範 一名漢文作文法示要 五〇 八

○校訂 堀捨次郎 深井鑑一郎 標註東萊博議 三冊 一・〇〇 一三

○標註插圖 深井鑑一郎 史記列傳 五冊 一・二五 一三

○史記列傳講義 全六冊 五冊出版 內藤耻叟 太田才治郎 各冊三五 六

○作詩眼 戈洞 堀 三〇 六

○氏物語 今泉定介 東宮侍講 本居豐穎大人閱 譯文源 新編紫史 松風 增田于信 六・〇〇 三六

○插圖 今泉定介 平家物語講義 六冊 三・〇〇 三〇

○太平記註釋 文學博士 萩野由之 國文學會 本文五 註釋二 三・〇〇 一六

○插圖 三木五百枝 保元物語講義 二冊 七〇 八

○平治物語講義 今泉定介 二冊 八〇 八

○大和物語詳解 落合直文序 井上毅藏 中村秋香 栗島山之助 四五 六

○落窪物語講義 中村秋香 三冊 一・三〇 一四

○徒然草講義 伊藤平章 插圖 今泉定介 二冊 五〇 八

○竹取物語講義 今泉定介 二〇 四

○紫式部日記講義 三木五百枝 三〇 六

○伊勢物語講義 今泉定介 三〇 六

○土佐日記講義 今泉定介 二〇 四

○神皇正統記講義 六〇 八

○方丈記講義 今泉定介 二〇 四

○十六夜日記講義 三木五百枝 二〇 四

○百人一首講義 島山健 一五 二

○新註古今和歌集講義 增田于信 生田目經德 二冊 六〇 八

○更科日記講義 大塚彥太郎 三〇 四

○宇治拾遺物語註釋 三輪杉根 三木五百枝 二冊 八〇 八

○枕草紙詳解 松平靜 三冊 一・八〇 一六

○駿臺雜話註釋 城井壽章 關儀一郎 六五 八

○國語作文 文學博士 小杉榲邨 美文模範 小森松風 一名美文良材 五〇 六

○官職制度沿革史 文學博士 小中村清矩翁 一・二〇 八

○國史學のしを利 文學博士 萩野由之 小中村清矩翁 五〇 六

○註釋東關紀行 文學博士 萩野由之 高等師範學校 島中、辻橋共著 (東海道紀行文) 新井無二郎 三五 四

○用字鑑 國漢文及作文 大塚彥太郎 六〇 八

○動詞形容詞活語集 文學博士 重野安繹 文學博士 小杉榲邨 三〇 四

○國語漢文模範 一名和漢文對照 岡吉胤 八五 八

○國語集解 生田目經德 前後二冊 一・〇〇 八

○我物語 標註 異本 曾 五〇 八

○國文學講義全書 中等教育 二・八〇 三〇

(講義書目)◎神皇正統記◎古今和歌集◎十六夜日記◎徒然草◎伊勢物語◎百人一首◎土佐日記◎竹取物語◎和文讀本問答

○國學院講習會講義 畠山健 今泉定介 六五 八

○御伽草紙 二冊 文學博士 萩野由之 七五 八

○新編御伽草紙 二冊 七五 八

○紀貫之歌集（増田千信 珍）	三〇	四〇
○神祇要錄（内務省神社局員 楢崎吉次 神宮官 國幣社） 附錄 神宮官國幣社府縣社以下神社並神職一覽	一・五〇	八〇
○神職試驗問題講義（内務省神社局員 楢崎吉次 必携）	一・二〇	八〇
○祝詞全書（大教正 岡吉胤 訂正増補） 附り 神官教職必携 葬祭要義	五五	六〇
○實用中學講義（中等教育 完結） 十八冊	一冊二〇	一〇
○土木測量法（伊藤壽耶 實地應用） 平面の高低 鐵道 河川 流量測量	八五	八〇
○社會心理學（文學士 德谷哲之助）	八五	八〇
○西洋歷史綱要（井原儀 新最） 全三冊	二・二〇	二〇
○世界近世史（井原儀 新最） 英獨兩語插入	一・三〇	一〇
○日本俗語文典（松下大三郎）	八〇	八〇
○新編日本文典（松平靜 松下大三郎）	五五	八〇
○日本文典摘要（菊池金正 受驗應用）	二五	二〇
○英習字帖（新案 白鉄 今泉秀太郎） 全六冊	四五	二〇
○都の春風（西村天囚居士）	二五	四〇
○山色水聲（落合直文 森野由之 小中村義象 増田千信）	一五	二〇
○紀行八種（天囚居士西村時彦）	三五	四〇
○波山始末（史談會 武田耕雲齋 件）	六〇	八〇
○日韓會話獨學（在釜山 島井浩 京城諭說鎭圖 川寅）	五〇	四〇
○英華字典（東京帝國大學教授文學博士 井上哲次郎 増訂 三版）	七・五〇	三〇
○英文四十七士（若色畫像 銘々傳）	八〇	四〇
○新式英語（工手學校英語教授 佐竹萬三 五十音發音法、常用英語、普通英語講義）	五〇	六〇

○新編代數學（眞野肇 宮田耀之助） 上下各	六〇	六〇
○摘要算術（原濱吉） 中學生參考用書 各科二ヶ月卒業	四〇	六〇
○摘要代數（原濱吉）	三〇	四〇
○平面幾何學講義（工手學校數學教師 眞野肇 自修 白井義督）	六五	八〇
○速成幾何學（ちやーるす、すみす 宮田耀之助） 平面之部	四〇	四〇
○代數學問題詳解（柘植亞美 高野松次郎）	五〇	八〇
○描圖法（應用地理 松浦琴鶴） 製圖用書	六五	六〇
○家相秘傳集（松浦琴鶴） 二	四〇	四〇
○方鑑秘傳集（東京帝國大學畫士 近澤勝美） 二	四〇	四〇
○人身生理圖（訂正増補 三宅秀 柴山五郎作 關以雄） 懸圖 二幅	四・四〇	一三〇
○傳染病豫防消毒一覽（醫學博士 大澤謙二 醫學博士 三宅秀 學校 關以雄） 懸幅	一・二〇	八〇
○衛生講話材料（醫學博士 大澤謙二 醫學博士 北里柴三郎 關以雄） 最近學說 正續 二冊	一・二〇	八〇
○學校衛生講話材料（陸軍軍醫總監 石黑忠悳 東京盲啞學校教授 奥村三策）	三五	二〇
○普通按摩鍼灸學（醫士 久木田七郎）	一・五〇	八〇
○臨床鍼灸指南（醫士 久木田七郎） 十四徑及精圖入	九〇	八〇
○臨床按摩術指南（マッサージ 應用） 精圖數十個入	一・三〇	八〇
○各府縣鍼灸術試驗問題解答案（山本新梧 小野田範司）	七五	六〇
○受驗用鍼灸學（醫士 河野敏人）	六五	四〇
○日本大家處方新書（醫學士 馬島珪之助 關藤次郎）	一・二〇	八〇
○普通療病新書（醫學士 竹中成憲 關以雄） 附り 處方調劑術	六〇	四〇
○實習救急法（通俗學校）	三五	四〇

○家庭衛生新書	醫士 岡部清之助	四五	六
○普通臨床看病法	關 藤次郎	三〇	四
○普通妊娠論 附り妊婦の攝生（一名兒を舉くる法）小兒養育法合本一册	産科婦人科 楠田謙藏 産科婦人科醫士 渡邊光次	六〇	八
○妊産婦の心得 一名安産育兒の栞	産科婦人科 櫻井病院長 櫻井郁次郎 廣瀨弘見	三五	四
○最新産婆學 一名産科婦學	産科婦人科楠田病院長 楠田謙藏	一・三〇	一〇
○衛生講和婦人の友	産科婦人科醫院長 渡邊光次	五五	六
○社會衛生花柳病豫防療法 圖入	花柳病學研究會 東京小兒科病院長醫學博士 瀨川昌耆 産科婦人科 楠田病院長 楠田謙藏 豐岡舟山	六〇	六
○情育觀 一名男女交際の栞		四五	六
○社會教育肺結核（肺患者攝生法）	醫學博士 北里柴三郎閲 醫學博士 柴山五郎作	六五	六
○最近之肺結核療法	醫學博士 北里柴三郎閲 醫學博士 柴山五郎作	一・〇〇	六
○肺結核豫防及療法	醫學士 竹中成憲 日本私立衛生會編輯主任 關以雄	六〇	六
○衛生辭林	關以雄	一・二〇	八
○國民教育衛生讀本	醫學士 竹中成憲	四五	六
○諸病應急衛生寶典 一名醫者の來るまで	醫學士 中原貞衛閲 故陸軍二等軍醫 小池毅	七〇	六
○實用繃帶學 密圖 七十有餘		五五	四
○産婆看護婦規則詳解 附産婆試驗問題	關 藤次郎	三〇	四
○産婆看護婦臨床寶典	關 藤次郎	六五	六

85
196

85
196

077595-000-9

85-196

国漢文及作文類字鑑

新井　無二郎／編

M43. 6

DAC-0951